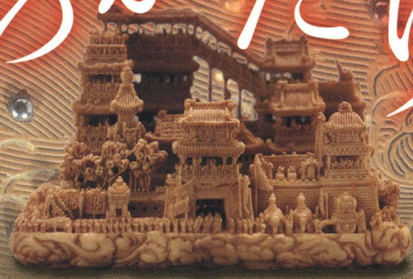


珍品ものがたり



珍品ものがたり

平成二十四年七月二十一日(土)～九月二日(日)

前期：七月二十一日(土)～八月九日(木)

後期：八月十一日(土)～九月二日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館

目次

3	—	ごあいさつ
4	—	珍品ものがたり
7	—	図版・解説
53	—	出品目録
ii	—	List of Exhibits
i	—	Foreword

凡例

一、本図録は、平成二十四年七月二十一日(土)から九月二日(日)までを会期とする展覧会「珍品ものがたり」の解説図録である。

一、本図録に掲載する作品番号は、展示番号と一致する。

一、会期中に展示替を行う。

一、本図録に掲載した作品寸法の単位はcmである。特に記載のない限りは、縦(奥行)×横(幅)×高さの順で示した。

一、本展覧会は当館学芸室主任研究官五味聖が企画し、同主任研究官太田彩が協力して構成した。また、本図録の概説は五味が執筆し、作品解説は以下のように分担した。

作品番号 1、2、8 (太田)

3～6、9～11、13～21 (五味)

7 (研究員岡本隆志)

12、22 (研究員斉藤全人)

一、本図録掲載の図版は、福島省、綿引雅俊(以上、株式会社インフォマーヂュ)、他が撮影した当館所蔵のフィルム、デジタル画像を使用した。また、44頁の参考図版は東京国立博物館より提供を受けた。

（あ）い（つ）

珍品とは珍しい品物、めったにない貴重なもの、の意味ですが、今回の展覧会では、作品そのものの珍しさに加えて、作品の成立や今日までの伝来に、伝承も含めて様々なものがたりがあるものに焦点を当てて、紹介します。

まずは鎌倉時代、我が国を大きく揺るがした出来事、元寇を描いた「蒙古襲来絵詞」は、現在伝えられている形にまとめられるまでに、複雑な経緯をたどったことが作品に示されていますが、元寇という事実を視覚的に伝える貴重な作品です。

次に、豊臣秀吉や徳川家康などの歴史上の有名人たちがその伝来に関わっているものが含まれます。豊臣秀吉が禁裏の所蔵品を模したとの伝承がある「葛細道時絵文台硯箱」は、金銀の時絵による華やかなもので、桃山時代の気風をよく伝える時絵の名品として知られています。今日、全く同じ図様のものが三件、当館に伝えられています。また、秀吉による大坂城の備蓄金との伝承のある「黄金分銅」は徳川家康に引き継がれたといわれ、明治三十三年（一九〇〇）に尾張徳川家から皇室に献上されています。

また、江戸時代、永い太平の時期に、技巧の凝らされた工芸作品が作られます。その中でも、超絶した彫技による根付「象墜」を紹介します。小さな根付の中に幾つもの楼閣が彫り表され、そこには八八〇人もの人々や、鳥や動物などが彫り込まれています。

そして嘉永六年（一八五三）には、ロシア国使節プチャーチンが長崎に来航します。この出来事を描いた絵巻や、開国後、万延元年（一八六〇）に初めて使節がアメリカ合衆国へ渡り、ブキャナン大統領から贈られたメダルなども紹介します。

これらの品々を生み出し、伝えてきた人々の想いに心を寄せ、そのものがたりを楽しむ機会となれば幸いです。

平成二十四年七月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第58回 珍品ものがたり)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	菩薩立像 (伝 蒙古仏)		一軀	平安時代 (10~11世紀)	p. 8-9
2	蒙古襲来絵詞		二巻	鎌倉時代 (13世紀)	p. 10-13
3	黄金分銅		三点	桃山時代~江戸時代初期 (17世紀)	p. 14
4	薦細道蒔絵文台硯箱 [御在来]		一具	桃山時代~江戸時代初期 (16~17世紀)	p. 15-18
5	薦細道蒔絵文台硯箱 [旧桂宮家伝来]		一具	桃山時代~江戸時代初期 (16~17世紀)	p. 15-18
6	薦細道蒔絵文台硯箱 [上杉家伝来]		一具	江戸時代 (17世紀)	p. 15-18
7	蓮華翁茶壺 付 書状 (伝 徳川家康筆)		一口	室町時代後期~桃山時代 (16世紀)	p. 20-21
8	南蛮人渡来図屏風		六曲一双	江戸時代 (17世紀)	p. 22-23
9	青海波塗硯箱	伝 青海勘七	一合	江戸時代 (17世紀)	p. 24-25
10	象墜	小島彤山	一点	江戸時代 (文政6年 (1823))	p. 26-28
11	象墜記 付 写本二巻, 版本一帖	頼山陽	一巻	江戸時代 (文政10年 (1827))	p. 29-31
12	ブチャーチン長崎上陸図	田川玉巖	一巻	江戸時代 (19世紀)	p. 32-33
13	米国記念牌		二点	1860	p. 34-35
14	西南戦争熊本城矢文・征矢		二点	明治10年 (1877)	p. 36-37
15	水晶玉蟠龍置物		一組	明治12年 (1879)	p. 38-39
16	ジャボン製蒔絵菓子器		二点	明治後期 (20世紀)	p. 40
17	鶯鳥卵蒔絵盃		一点	明治後期 (20世紀)	p. 41
18	旧諸大名槍雛形	山田幾右衛門	四七四点のうち	明治17年 (1884)	p. 42-45
19	日本歴代古金銀貨幣模造鑑	藤島常興	一組	明治22年 (1889)	p. 46-49
20	日本各邦製古金銀貨幣模造鑑	藤島常興	一組	明治22年 (1889)	p. 46-49
21	瑞鳳扇	御木本幸吉	一点	昭和3年 (1928)	p. 50-51
22	紫雲靈桐鳳凰瑞祥之図	桂田湖城	一幅	昭和3年 (1928)	p. 52

珍品ものがたり

珍品とは何か。珍品という言葉には、めつたにないものゝあるいは、貴いものゝの意味がある。本展で珍品として焦点を当てたのは、作品の成立や今日までの伝来に、様々な歴史や背景がある品々、そして驚くような素材や技術で制作された作品である。

歴史的視点の面白さから選んだ作品には、歴史上の著名な人物、日本を揺り動かした重要な出来事にまつわるもの等が含まれる。これらの品々の伝来には、それを裏付ける史料が遺されていない、伝承あるいは伝説に過ぎないものもあるが、その成り立ちや、伝えられてきた経緯を考える上では大切な要素である。また、超絶した技巧が凝らされた、あるいは使用された材料などが珍しい作品においては、ものを作り出す人の創意あるいは熱意が、時としては、過剰で濃密な作品を生み出す。それが、時によつては奇異にも映る。このように、珍品の言葉には、奇抜なあるいは異風な、といった意味合いも込められる場合がある。しかし、この奇抜さが、観る側の心を動かす力にもなっている。本展で紹介している珍品は以上のような視点から選んでおり、出品作品については本図録のそれぞれの解説を見ていただきたいと思う。ここでは、今回出品していないものから、珍品と呼ぶべき作品を幾つか紹介しておきたい。

「貴いもの」という視点で考えるならば、当館の収蔵品の中にはそれに相当する作品が数多い。例えば、明治十一年に皇室に献上された法隆寺献納宝物には、現在では他に類例の遺されていないものがある。「賢聖瓢壺」唐時代、八世紀は瓢の中を割り貫いて蓋を付けて壺に仕立てたもので、胴部の表面には古代中国の賢者として著名な九人の人物を表している。瓢の若い実を型に納めて生長させ、壺の形に整えて表面に文様を浮き上がらせた手法によるものと言われている。径が十一・六cm、総高で十六・八cmのものだが、見た目よりも軽く、総重量がわずか七三グラムほどであることにも驚かされる。

同じ法隆寺献納宝物に、「逆沢瀉威鎧雛形」平安時代、十二世紀がある。精巧に作られた鎧の雛形で、ほぼ五分の一の縮尺のものである。江戸時代には聖徳太子の幼少時の玩具として伝承されて法隆寺に伝えられていた。雛形とはいえ、

現存の鎧の中でも古い形式を伝えており、今日では平安時代末期に流行した社寺への奉献用の小形調度類の一種と考えられている。

また、書の名品の中には、書聖と仰がれた中国、東晋時代(四世紀)の書家、王羲之の搨本「喪乱帖」がある。唐の太宗皇帝は王羲之の書をことのほか崇拜し、収集に努めたという。また太宗や高宗は専門の技術者に命じて極めて精巧な技法で王羲之の書を模写させていた。現在、王羲之の真跡は存在していない。そうした中で本品は、この唐時代に制作された搨本(模本)の最優品として国内外でも殊に名高い品である。もとは聖武天皇遺愛の品として東大寺正倉院の宝庫に納められていた一品かとも言われている。

次に、鎌倉時代初期の歌人、藤原定家(一一六二―一二四二)が書写した「更級日記」がある。「更級日記」は、平安時代の中流貴族の女性の回想記で、菅原孝標の娘(二〇八?)の著作として知られる。十三歳頃から五十三歳頃まで、「源氏物語」が書かれて評判となつた少女時代から、夫に先立たれた晩年までを記している。定家によるこの写本は、現存する写本の祖本といわれ、唯一の証本として大変に貴重である。本品が存在したことによつて、今日、「更級日記」の内容を知ることが出来るからである。

そして、現在、当館が平成十六年から十数年に及ぶ計画で修理を進めている高階隆兼筆「春日権現験記絵」全二十巻は、遺例の少ない絹本の絵巻で、一場面の欠失もなく伝えられている。附属する目録から、鎌倉時代、延慶二年(二二〇九)頃の成立、制作の目的などの由来が明確であり、絵画作品としても優れた一級品としての高い評価を得ている。装丁や収納の箱も当初あるいはそれを大きくは降らない時期のものが完存しており、およそ七百年前のものが、ほぼ完全な姿で今日に伝えられているのは、歴史的にみても稀有な出来事である。

また、伝牧谿筆「羅蔔蕪菁図」も稀有な作品の一つである。牧谿は宋代末期から元時代初期の僧で、その水墨画が、日本に鎌倉時代末頃よりもたらされて、室町時代には、大変に高く評価され、日本の絵画史にも大きな影響を与えた。当館の「羅蔔蕪菁図」は、もとは卷子であった蔬菜図を切断して対幅の掛軸に仕立てたもので、ダイコンとハクサイが水墨によつてそれぞれ一幅ずつに

描かれている。この絵は、伝来によれば、十四世紀末から十五世紀初頭にかけての頃に明国王から足利義満に贈られたもので、その後は足利義政が所持、後に武田信重が功績により賜り、天正年間に徳川家へ、徳川家より水戸徳川頼房へ、徳川光圀から高松松平家へ、その後は一幅ずつに分かれて別々に幾人かの所持者を経て、明治二十年、外務大臣井上馨より明治天皇へ献上された。義満の東山御物に含まれていたことは、表装に明時代前期の渡来裂である最高級の牡丹唐草文の金襴が使われていることがそれを裏付けている。桃山時代の茶会記にもたびたび登場する品である。

これらのほか、「粘葉本和漢朗詠集」や「金沢本万葉集」など美しい装飾料紙に書かれた平安時代の書写本の名筆の数々がある。また、琵琶や笙などの雅楽器の数々は、後世の補修を経て伝えられているが、その作品名や制作期を平安時代や鎌倉時代までさかのぼる伝承が付けられているものが含まれる。このように、貴く、名高い名品は枚挙にいとまがない。

では、ここからは本展の内容を補う意味で、珍品を生み出した人々の創意とその品々を巡るものがたりを付け加えて、紹介しておきたい。

幕末の志士、平野国臣（二八二八〜六四）による著作である「神武必勝論」(挿図1)は、文久二年（一八六二）四月から翌年の三月まで国臣が福岡の獄中で過ごしたおよそ一年の間にまとめられたものである。国臣は、獄中で筆墨を与えられなかったため、紙捻^{こまゆ}を作つて墨の代わりに紙に糊で貼り付けて文字を表し、論を編んだ。上中下の三冊からなり、下巻の奥書に「文久三年上巳（三月三日）稿成」



挿図1 神武必勝論 平野国臣 文久3年(1863)

とある。その内容は、攘夷を決して天皇のもとに公武一体となつて準備すれば、外夷の侵攻を防ぐことができる^{と述べている}。この完成後まもなく、国臣は許されて福岡藩に戻るが、同年七月に兵を集めて但馬生野の代官所を占拠する、いわゆる生野の変をおこした。しかし、この挙兵はわずか三日で失敗に終わり、国臣は再び捕らえられて翌四年に処刑された。享年三十七歳であった。国臣はこの生野の変に敗れた際に、「神武必勝論」を同志の太田仁右衛門等に記念の品として遺した。仁右衛門等はこれを分蔵して各家に伝えたが、後にその遺族等は同書が世に埋もれ、散逸することを恐れ、三巻をあわせて明治天皇に献上したのは明治二十年一月のことである。明治天皇は、「国臣の苦節をあわれみ、この書が世に知られていないことを憾み、大蔵省印刷局に命じて「其の紙捻本の模型及び黒漆版」を作らせ、皇族、大臣、遺族等に下賜したという（『明治天皇紀』明治二十年一月二十六日）。この「模型」にあたると思われるものが当庁書陵部に三件、保管されている。原本を何らかの手法で型取りして、その型を用いて和紙に立体的に写したもので、いずれも原本の様子をよく伝えている。巻頭に総理大臣伊藤博文の書が、巻末に皇太后宮大夫杉孫七郎の跋文があり、これも型を用いて和紙に文字をレリーフ状に浮き上がらせる手法で表されている。この型取りやレリーフ状に仕上げた方法については詳らかでない。ただ、印刷局は当時、紙幣だけでなく様々な製品の開発に関わっており、和紙の特徴を生かして金唐革に似せた擬革紙（現在、金唐革紙あるいは金唐紙と呼ばれる）を壁紙として生産しており、明治二十年には海外にも数多く輸出していた。明治二十一年に竣工の明治宮殿にも使用された、印刷局の制作による天井や壁の装飾紙が、模様をレリーフ状に打ち出した和紙によるものであることが知られている。明治二十三年には印刷局は約十年間の壁紙製造に終止符を打ち、この事業を民営に移管している。印刷局が明治二十年にはすでに完成させていた手法によって「神武必勝論」の「模型」が作られたと推測され、興味は尽きない。

この維新後、明治二十年頃までの国内は、海外の制度、習慣、技術を採用入れた大変革に揺れ動いた時期であり、多くの古いものを捨て去るなかで、江戸時代以来の豊かな伝統技術を継承していた技術者が、記録という意味で制作したものがあり、本展で「旧諸大名槍雛形」(作品番号18)、藤島常興（一八二九〜九八）による、明治二十二年完成の二件の貨幣模造鑑(作品番号19・20)の三件を紹介している。このうち模造鑑は、伝統的な彫金技術によつて作られたもので、刻印等も緻密で、金属の色揚げ、墨書などもよく模造されている。こうした歴代の貨幣が模造された背景には、大蔵省紙幣寮が明治七年から編纂に着手した「大



挿図4 水仙置物 安藤緑山 大正期



挿図2 柿置物 安藤緑山 大正9年(1920)



挿図5 西洋蘭置物 奥田浩堂 昭和10年代



挿図3 椿置物 安藤緑山 大正期

日本貨幣史』や、印刷局によって明治十一年に出された『貨幣精図』の精密な石版画による質の高い図版など、様々な修史や研究の成果を踏まえていることは想像に難くない。常興の生涯は、幕末から明治初期の激動の時代に翻弄された。家業の刀装金工から時代が求めた銃砲制作への従事、後に測量機器へ転身と大きく変わる。常興はその晩年には貨幣の模造へ力を注ぐが、測量機器制作によって国事の一助となろうとしたように、貨幣模造によって、国内の貨幣沿革を一目瞭然と整えることに情熱を傾けたのであった。明治二十年頃までは、官主導のもとに歴史を編纂し、古い文物、慣習を記録、保存しようとする動きが分野で見られたが、民間においてもその記録にエネルギーを費やした人々が存在したのだった。

最後に、大正期から昭和前期に作られた象牙彫刻の、写実に限りなく挑んだ作品を紹介しておこう。安藤緑山(一八八五?—一九五五)は、明治末期から昭和前期にかけて活動した象牙彫刻家である。野菜や果物、花などを主題とし、その枝を折りとつてさりげなく飾り置いた風情を、ほぼ原寸に近い大きさで、本物と見紛うがばかりの写実表現で置物としている(挿図2・3・4)。複雑な部材の組み合わせには、金属の細長いネジが巧みに使われているようである。また、その鮮やかな染めの技法は、写実表現を高める上で重要な役割を果たしており、その艶やかな表面から、染料の上にもう一層、なにか工夫が凝らされているように見受けられる。なお、この染めの技法は緑山に独自のもので、一代限りで絶えた、と言われている。しかし、緑山よりやや若い年代の奥田浩堂(一八九二—一九六〇)による洋蘭の作品が当館に伝えられており(挿図5)、二代浩堂氏の証言によれば、大正期から昭和前期にかけては、緑山を始めとする、ごく限られた数名によって、このような彩色の施された象牙彫刻が手がけられていたようである。こうした象牙彫刻の優品の多くは海外に輸出され、また、国内の愛好家たちによって秘蔵されたと言われ、確認されている作品は数少なく、皇室にこれら数点が伝えられていることは貴重である。なお、ここに挙げた緑山の作品には、すべて「緑山作」「金田記」の刻銘があり、銘ぶりも共通していて、同時期の作品と考えられる。この金田とは、牙彫商金田兼次郎のことであろう。緑山は明治四十年代から昭和初期にかけて日本美術協会、東京彫工会を主な発表の場としており、これら緑山作品の出品者が金田の名前となっているからである。以上、さまざまな観点からの珍品を補足してみた。本展では、作品を鑑賞しつつ、何によって珍品なのか、それぞれのものがたりを楽しんでいただければと思う。

(五味 聖／当館学芸室主任研究官)

凶版・解説





1 菩薩立像(伝蒙古仏)

一 軀

木彫、一木造

像高 一三二・〇

平安時代、十〜十一世紀

本像は、明治三十二年（一八九九）二月、対馬の巡回に赴いた侍従武官・佐々木直（すなわち一八五二〜一九二八）が、法清寺より持ち帰ったと記録される。

その由来は、鎌倉時代の文永十一年（一二七四）の蒙古襲来の際、その船首を飾っていたもので、それがその戦の後に海岸に漂着し、二十二躰が佐須観音堂に納められ、これが蒙古仏と呼ばれて伝えられたという説。また一説には、十五世紀に高麗で排仏論が起こった際、海中に投げ込まれた仏像が対馬国の佐須浦に漂着したので、これを集めて佐須観音堂に保存して伝えたとする。いずれにしても、本像を含めたこれらの仏像が異国の地のものであるという言い伝えは、本像が伝来してきた対馬という地が、古来より、我が国の防衛のために特別な位置に存在していたことをうかがわせる。

本像が伝来した法清寺は、対馬南部の西海岸、元寇の激戦地となつた小茂田浜から佐須川を三キロほど遡つた所に建ち、応戦した宗助国の亡骸を祀つたというお塚がある。本像は、明治二十一年に他の二十躰余の仏像と共に、佐須川対岸の佐須観音の旧所に建つお堂から法清寺境内の観音堂に移されたものの一躰である。たつぷりとした重量感のある体軀は一木造によるもので、手首や足首が欠損し、顔貌や天冠等の彫刻表面も経年の損傷によって摩滅しているなど、虫損も多く、その損傷は大きい。柄によって自立するように手が加えられている。頭には中央に仏の彫刻を付けた宝冠を載せ、髪は髻を高く結い、右手を垂下して左手を胸前に上げる形の像容で、腕輪や瓔珞を着けていることから菩薩像であることが判断出来る。

法清寺には、現在も本像と類似する十六躰の仏像が残されており（長崎県指定有形文化財）、専門的な調査によってこれらは平安時代の日本の仏像であると報告されている。本像はこれらと一群の木彫仏として伝えられたもので、江戸時代後半期には二十二躰があつたと記録される。いかなる理由でこれらがこの地に存在するかは伝承以上のことは不明であるが、前述のように、対馬という地の特殊性の中で、日本を揺るがした大事件と結びついて伝えられていることに、歴史的な興味を抱かせる作品である。





絵5 (前巻第17~18紙) 後方より駆けつける白石六郎通泰とその手勢

2 蒙古襲来絵詞

二巻

紙本着色

前巻・総四〇・三×二四五〇・六

後巻・総四〇・二×二一一・八

鎌倉時代(十三世紀)

鎌倉時代の元寇(蒙古軍の襲来)は、わが国の歴史上の重大事件の一つである。その歴史的な大事件を題材とした本絵巻は、視覚的な史料として必ず教科書に掲載されている象徴的な作品として良く知られる。

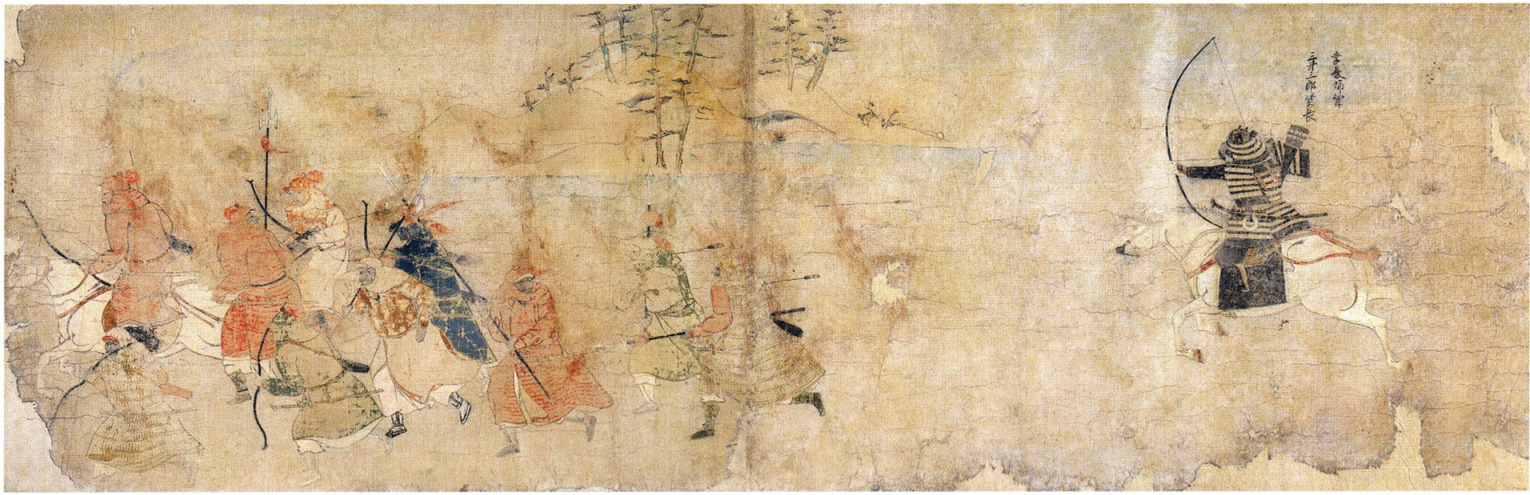
前巻、後巻の全二巻からなる本絵巻は、それぞれに二度にわたる元寇―前巻に文永の役、後巻に弘安の役―の様子を主体にまとめられている。その内容は、竹崎季長という肥後国の御家人が文永の役に参戦して活躍し、その恩賞を鎌倉に願って賜るまでが前巻、さらに後巻では、季長は再び参戦して敵船に乗り込んで活躍、その戦功を肥後国守護に伝えて記録を残した、というもので、主人公・竹崎季長の功績を讃える内容として展開している。

しかし、かねてより本絵巻の詞書の文字や描写には数種類の書風、画風が認められるために絵巻の成立事情や伝来等が議論されてきた。そうした状況を踏まえて、平成五年に行った当館での調査によって、この絵巻には、書風、画風の違いに加えて、その紙質や加工の状況が異なることや、描写が変更されていることなどが判り、さらに現状の状態―現在の詞書と絵の配列による前後二巻に仕立てられたのは、寛政九年(二七九七)、熊本藩藩校において、国学者・長瀬真幸が主導して検討、修理をした際であることが、旧軸墨書の内容から明らかとなった。こうした事実と多くの問題点を整理して考察していくと、本絵巻は、別に作成された数種類の絵巻が現状で一つの内容に仕立てられていると考える間違いない。とはいえ、寛政九年の熊本藩藩校での修理の前、またその後には制作さ

れた模本類や関連史料から考えて、その時点ですでに現状の描写となっていて、またその精粗の差、画風の優劣等の差はあるにせよ、絵巻の損傷や紙質、加工の状態、他の中世期の絵巻の画風等と比較しても、本絵巻の描写は中世期までに制作されたものであり、数種類の絵巻が混在した形で早い時期に本絵巻が成立していたことも確かである。

このような絵巻が成立した背景には、やはり、元寇という大事件を通して、その活躍を、本人、あるいはその子孫が明確に表して遺したい、という強い願望があったことが考えられる。この絵巻において、遺したい、遺されたい人物は主人公の竹崎季長であることは言うまでもない。竹崎季長は実在の人物であり、元寇での戦功を訴えた結果、その戦功を認められて甲佐神社の社領であった海東郡(宇城市小川町東部)の地頭職を得た。こうしたことに感謝して、絵巻を甲佐神社に奉納したことを記す文書が絵巻の最後に付属している。数種類の絵巻が、最初にどのような事情で描かれ、何故にそれが竹崎季長の周辺に集まったのか、現在のところ、その事情を示す史料はない。しかし、現状から数種類の絵巻が混在していること、そして、主人公である竹崎季長とされる人物の描写と記名等が一様でなく、意図的に手が加えられている様子からは、季長の功績を讃えるための意図的な変更と仕立て直し等を感じざるを得ない。

しかし、そうした事実は、元寇という事件の重大さ、それに命をかけて戦った一御家人の強い思いが反映していることであり、そのような絵巻が存在しているということが、同時にこの時期の絵巻というものの存在がどのようなものであったのか、ということを考えさせるものでもある。そうした意味でも、本絵巻が元寇という大事件、そしてその大事件を通しての当時の武士の事情等の世相を反映している貴重な歴史絵巻であることに間違いはない。



絵6 (前巻第20~21紙) 季長の姉婿・資長 退却する敵軍



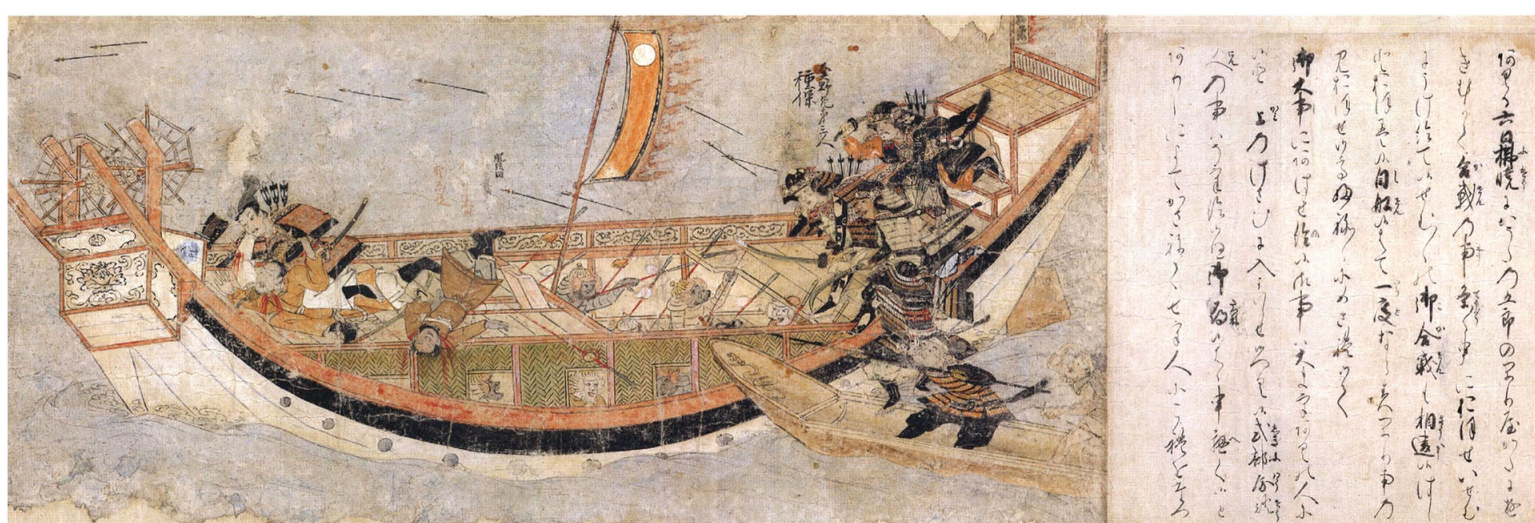
絵7 (前巻第23~24紙) 奮戦する季長



【参考】絵10 (前巻第40~41紙) 恩賞の馬を賜る季長

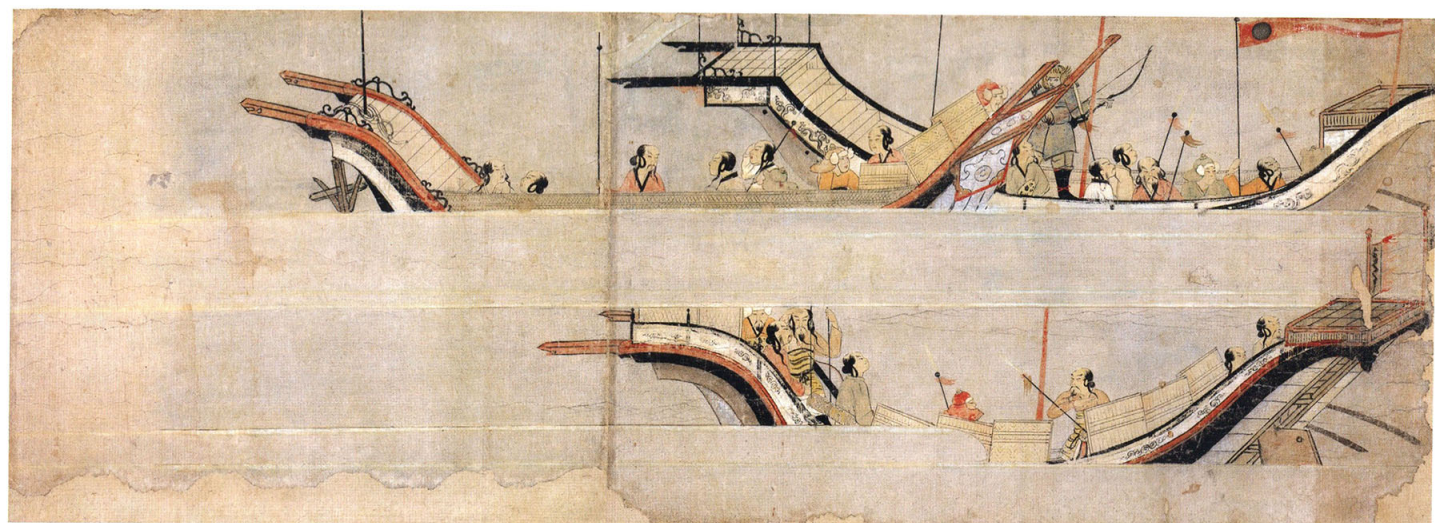


【参考】 絵12 (後巻第6~8紙) 石築地前を出陣する季長一行

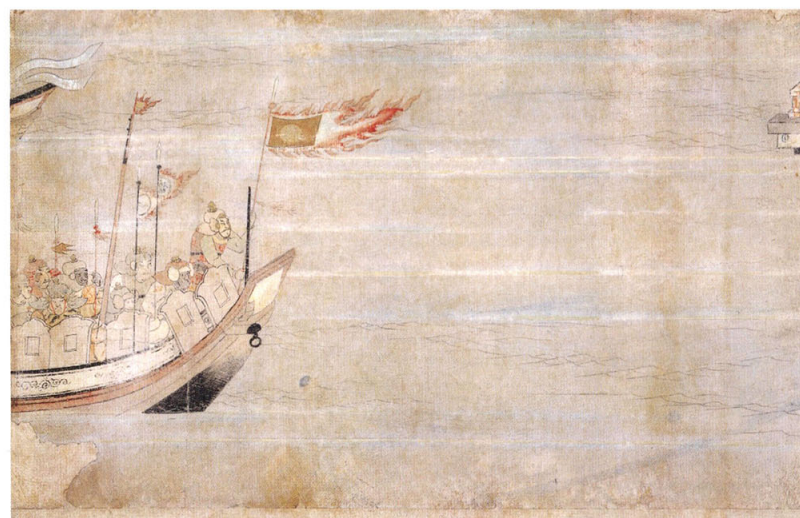


絵16 (後巻第26~27紙) 大矢野三兄弟と季長ら、敵船に討ち入る

詞13 (後巻第25紙)



絵19 (後巻第33~34紙) 敵船



絵18 (後巻第31紙) 敵船



絵17 (後巻第28紙) 敵船



3 黄金分銅

三点

金

三・五×四・五×一・八 三七一〜三七三グラム
 桃山時代〜江戸時代初期(十七世紀)

分銅金あるいは印子金いんすきんと呼ばれる三点の金塊で、それぞれ表面に細やかな地紋と極印が刻まれる。一つは小花紋に桐紋、二つ目は布目で「吉」の字、三つ目は石目地に「定」の字がある。分銅は、その重さから小分銅、大分銅に分けられるが、本品は小分銅に当たる。元和元年(一六二五)大坂城攻略の折の戦利品との伝承がある。

桃山時代から江戸時代にかけて、時の権力者たちが非常時の備蓄用として、定量で分銅の形に造った金塊があったことが史料から知られている。本品が豊臣秀吉の備蓄金であることを示す史料は遺されていないが、徳川家康が遺した金であることを示す史料は『当代記』慶長十二年(一六〇七)によれば家康が備蓄用金塊として印子金を一万個製作している。また、元和二年(一六二二)に家康薨去の折、家康の遺産を尾張、駿河(後の紀伊)、水戸の三家に分与している。この記録「久能御蔵金銀請取帳」には金の分銅が百個入った箱が四十一箱、金の印子百個入り一箱が含まれていたことが記されている。また、尾張家初代義直への分与の目録「金子之覚」には百目吹きひらきの分銅(およそ三七三グラム)が数千個あることが記され、これが同家に伝えられてきた。本品は、明治三十三年(一九〇〇)五月の皇太子(大正天皇)御結婚に際して、尾張徳川家第十八代義礼より献上されたものである。

なお、日本銀行金融研究所貨幣博物館には、明治三十七年に義礼の篤志により納められた、本品と同種の金塊三〇〇個が保管されている。これは日露戦争の折、戦費調達のため巨額の外債が発行されたことを受けて、金本位制度のもとで正貨準備のための貴金属の備蓄が急務となり、民間から集められた古金銀貨幣のひとつである。



4 葛細道詩絵文台硯箱「御在来」

一具

木製漆塗、蒔絵

文台三・四・九×五九・七×九・五

硯箱二・八×二六・七×七・〇

桃山時代、江戸時代初期(十六、十七世紀)



5 葛細道詩絵文台硯箱「旧桂宮家伝来」

一具

木製漆塗、蒔絵

文台三・四・八×五九・四×九・三

硯箱二・八×二六・七×七・〇

桃山時代、江戸時代初期(十六、十七世紀)



6 葛細道詩絵文台硯箱「上杉家伝来」

一具

木製漆塗、蒔絵

文台三・五・〇×五九・五×九・五

硯箱二・八×二六・六×六・九

江戸時代(十七世紀)



【旧桂宮家伝来】硯箱 蓋裏



【御在来】硯箱



【上杉家伝来】硯箱



これら三件の「葛細道時絵文台硯箱」は文台と硯箱を一具とするもので、『伊勢物語』の一節「宇津山」の場面を主題とし、物語の登場人物を象徴する笈と結文を葛が茂る山間に配した図様が蒔絵で表されている。葛の葉や山中にかかる雲の表現には金銀の薄い板を切り抜いたものが多用され、豪華さが際立っている。葛の葉や雲を大きく配した大胆な意匠を、伝統的な高蒔絵の技法で表した華麗な作品で、桃山時代の気風をよく伝えている。

三件とも大きさ、意匠の細部まで共通している。作品番号4は、少なくとも十八世紀後半には宮中に伝えられていたと考えられる品で「御在来」と呼ばれる。作品番号5は、明治九年（一八六七）に桂宮淑子内親王より献上された「旧桂宮家伝来」の品。作品番号6は、明治八年に旧出羽米沢藩主、上杉齋憲より献上された「上杉家伝来」の品である。「御在来」と「旧桂宮家伝来」の品は、線表現や、切金四角や長方形に小さく切った金銀の薄板の形や大きさにやや違いがあるが、よく図様の配置が一致することから、同じ下図を元に制作したと考えられる。「上杉家伝来」は、文台の裏にまで蒔絵をしている点で大きく異なり、切金も一回り大きく切り抜かれている。表現が全体に誇張されていることから、「御在来」と「旧桂宮家伝来」あるいは別の同様の作品の写しとして、原本作品の情報に限られる中で作られたと考えられる。

ところで「御在来」と「旧桂宮家伝来」の品には豊臣秀吉が幾つか作って諸方に贈ったもの、との伝承が付されている。また、「上杉家伝来」に付属する、文久三年（一八六三）に米沢藩の右筆を勤めた宮島吉利が書写した寛文四年（一六六四）の添状によれば、本品は、東山御物であった「葛細道時絵文台硯箱」が禁裏に献上されていたものを秀吉が写しを作らせたものという。これほど似通った作品が三点も存在し、また秀吉が旧桂宮家の初代智仁親王を一度は猶子とし、後に八条宮家の創設に大きく関与したことを考えると、この伝承も真実味を帯びてくる。なお、当館以外にもこの三件によく共通した十七世紀頃の作品があり、「葛細道時絵文台硯箱」は、江戸時代初期に非常にもてはやされ、精巧な写しが作られた一式であったことは間違いない。



[旧桂宮家伝来] 文台の部分



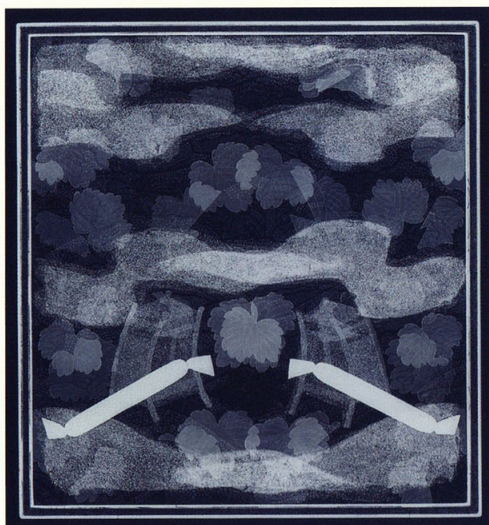
[御在来] 文台の部分



[上杉家伝来] 文台の裏面

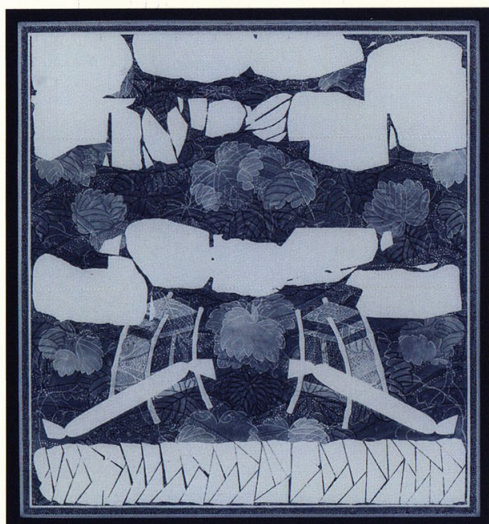
硯箱の技法の違い——X線透過撮影でわかること

左の三点の写真は、三件の硯箱の蓋を、修理を前にした調査の一環でX線透過撮影したものである。蓋表と蓋裏の時絵は、ほぼ同じような図様であり、これを重ねて透過した画像であることをまずは念頭において見てみよう。この画像によって、三件の硯箱が、外見が良く似ていても、時絵の下の漆下地の技法が全く異なることに驚かされる。画像で白く見える部分は、X線が透過しにくい部分、つまりは金属の部分と理解される。通常の時絵の画像は挿図③「上杉家伝来」のように写る。漆下地は透過されて、ほとんど影はなく、表面に置かれた金銀を文様に切り抜いたごく薄い金属板の部分が鮮明に写り、時絵紛の時かれた部分が薄く撮影されている。一方、挿



挿図① [御在来] 硯箱 蓋の X線透過写真

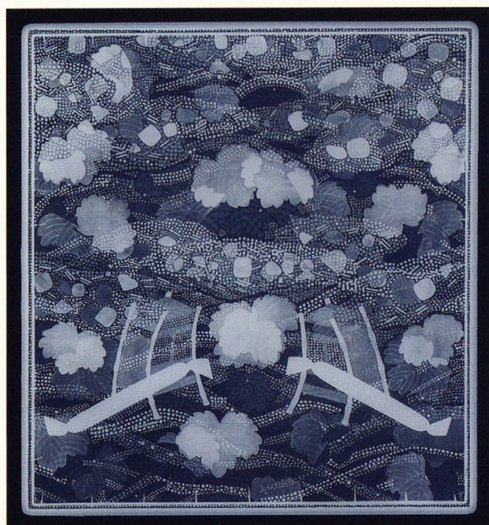
図①「御在来」は雲や地面の部分の高時絵の形にあわせて粒状のものが集まってもややもやとした画像が写る。下地に金属の粉が粒のようなものが時かかっていると推測される。そして挿図②「旧桂宮家伝来」にいたっては、表の時絵からは想像のできない影が撮影された。上の半分の白い塊のようなものは、雲の形に添って、適当に切り抜かれた金属板が石畳のように配されている。この金属板は、後の調査で鉛であることが確認された。下隅には、三角や台形に切り取られた鉛板がバズルのように組み合わせて置かれている。



挿図② [旧桂宮家伝来] 硯箱 蓋の X線透過写真

高時絵の行程を早く進めるための手法と考えられるが、こうした技法による漆工作品の例は、未だかつて他に知られていない。また、文台の方には、同じ高時絵が施されているにも関わらず、X線透過撮影写真をみても、三件いずれにも下地に金属が使用されている様子は見受けられない。

伝統的な緻密な時絵の下に隠されていた、漆下地の金属粉や鉛板の存在をどう考えるのか、結論を出すのは現段階では難しい。しかし、この図様の文台と硯箱のセットが当時、大変好まれたことはうかがい知ることができ、これらの制作の背景に、様々なドラマがあったのではと想像したくなる。



挿図③ [上杉家伝来] 硯箱 蓋の X線透過写真



7 蓮華翁茶壺 付書狀(伝徳川家康筆)

陶磁 径四二・五 高五四・五
室町時代後期(桃山時代(十六世紀))

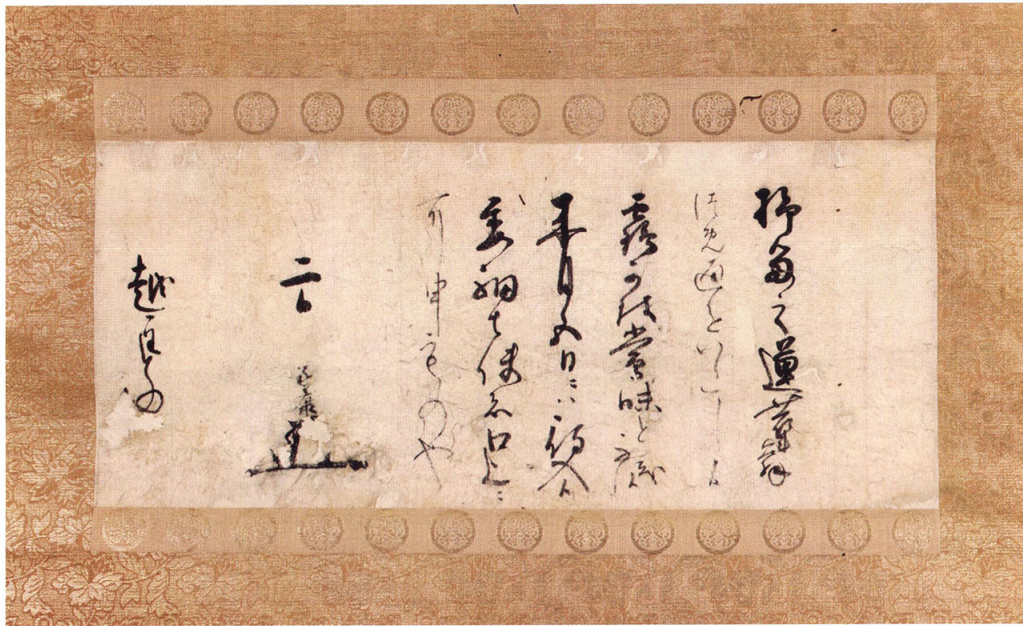
一口

書状

紙本墨書

本紙一九・三×四四・〇

一幅



抑留之蓮華翁

つめ通をいたし候間

露可致賞味と存儀候

来月五日ニハ待入候

委細は使者口上ニ

可申もの也

二日 家康(花押摸)

越主との



徳川家康が所持していた茶壺といえば、名物と呼ばれる唐物茶壺の姿を思い浮かべるだろう。胴部表面に数多くある作爲的な「瘡」が目立ち、ややグロテスクな印象を与える本品も、家康にまつわる伝来をもつ。

十六世紀の室町時代後期になると茶の湯の流行にともない、葉茶をおさめる茶壺の価値が高まり、十二世紀に中国南部で製産され日本へ輸入された唐物茶壺や、それらを写した瀬戸焼の和物茶壺が茶席で用いられていた。本品も貼り付けによる牡丹文などの作風や鉄釉の風合いなどから、瀬戸産の鉄釉牡丹貼花文四耳壺と推測される。ただし、高さも胴径も平均三十数センチである通常の茶壺の規格と比べると大きすぎるため、茶席で用いられたものではなく、葉茶の保存用の容器であった可能性が高い。

なお、本品には掛幅一点が付属する。徳川家康から「越主との」宛の書状で、このなかに本品の名称の由来である「蓮華翁」と記される。しかし、本書は署名や花押、書式の点から、家康の真正文書とは認められないとする指摘がある(徳川義宣「新修 徳川家康文書の研究 第二号」二〇〇六年)。この名称に関して付言すると、十一世紀後半から十二世紀前半に中国南部で製産された茶壺の一群に「蓮華王」と称されるものがあり、本来、それらには肩の部分に蓮華王印が押されている。本品はこの点でも蓮華王印がみられないことから、唐物茶壺の通例に則っておらず、和物茶壺と推定される要因となっている。本品が皇室に納められた経緯は以下の通り。

明治二十五年(一八九二)七月四日、明治天皇は高輪の通信大臣・伯爵後藤象二郎邸へ行幸された。天皇は広大な庭園を逍遙され、観世鏡之丞らによる能楽を御覧になり、熾仁、彰仁、能仁、載仁、依仁の五親王のほか、松方正義内閣総理大臣以下諸大臣らが陪食したフランス料理の晩餐を終えられた後、松旭斎天一の奇術、桃川如燕の講談、西幸吉の薩摩琵琶を御覧になった。夜になると一万匹の蛩が池辺に放たれ、宇治川の夏の風物を思わせる光景を天皇も楽しまれた。各余興の合間には宮内省楽師による和洋の奏樂がなされた。この日の賓客は二百七十三名にのぼり、天皇は午後一時に御出門、還御されたのは深夜十二時三十分におよんだとい、後藤の饗応はまさに贅を極めたものであった。本品は、この折に後藤から備前守家の太刀一振、陶製狸の置物とともに、天皇へ献上された。

紙本金地着色
本紙 各一五〇・八×三三四・二
江戸時代(十七世紀)

十六世紀、長崎に渡来するポルトガルを中心とした南蛮人や南蛮船の様子を描いた屏風を「南蛮屏風」と通称しているが、本図もその一つ。右隻には、コンパレー(大日傘)を従者に差しかけさせて悠然と南蛮寺に向かうカピタンを中心に、その後ろには様々な品を携えた一行が従い、その行き先である南蛮寺には、祭壇にキリスト像が掲げられている。南蛮寺の側の店先には、中国や南方の製品と思われる漆器や陶磁器などが並べられ、また行列上部に描かれる店の中では、女性が双六に興じている。これらの中で、商家が全て藁葺に描かれていることは、本図の祖型が商家の屋根を板葺きや瓦葺きに描く他の同種の屏風に比べて古いものであることを示しており、また教会内部やキリスト像を明確に描き入れていることは、慶長十七年(一六二二)のキリシタン禁令の影響を受ける以前の制作であろうことを示唆している。また左隻には、南蛮人が見守る中、沖合に停泊した南蛮船から品々が解船を使って陸揚げされる様子、また南蛮船上では秤を用いて生糸の値段を交渉して商談を進める商人の姿も描かれる。こうした南蛮船を通じての南蛮交易は、異国からもたらされる品々ばかりではなく、わが国からも様々な品が輸出され、文化や経済に活力を与えて豊かにしたのであった。

こうした近世初めの活発で豊かな文化、経済交流の一端を



右隻



左隻

示す本屏風は、徳川家康に縁の米迎院英長寺(静岡市葵区横内町)に伝来したもの。同寺は、慶長十四年(一六〇九)に家康によつて創建されと伝えられ、開山は家康の信任が厚かった廓山上人(一五七三―一六二五)。一説に、家康はこの寺で囲碁を楽しんだが、冬は隙間風があつて寒いために、その隙間風を防ぐために本屏風をこの寺に寄贈したのだと言う。文久元年(一八六一)に新宮高平によつて著された地誌『駿河志料』にも、同寺の紹介の中に家康「御手植楊梅」と共に「金屏風一双、大神君所賜なり」と本屏風が記され、屏風に描かれた図様が紹介されている。寺伝によれば、本屏風は慶長年間(一五九六―一六二五)にすでに同寺に入ったとされ、大切に伝えられてきた。この伝来を裏付けるように、近年、当館で行つた本屏風の解体修理の際、屏風内側の紙貼りに「英長寺「米迎院」等と記す墨書のある文書が含まれ、それらの年号からは十八世紀頃に解体修理を受けていることが判明している。

屏風は、明治二十二年(一八八九)一月十一日に明治天皇が前年に竣工した明治宮殿のある宮城へ赤坂仮皇居より徒御されたのに際し、家康より数えて徳川宗家第十六代となる徳川家達(一八六三―一九四〇)より皇室に献上された。因みに、寺に保管される屏風譲り受け書類は同年四月二十五日付、初代静岡県知事・関口隆吉が本屏風の今後の保存を懸念して家達に献納し、その対価として五百円を同寺に寄付されたことが知事本人によつて記されている。この書類や献上日から考えれば、本屏風が同寺より徳川家に渡されたのは前年だったのではないかと推察される。



9 青海波塗硯箱 伝 青海勘七

一合

木製漆塗、蒔絵

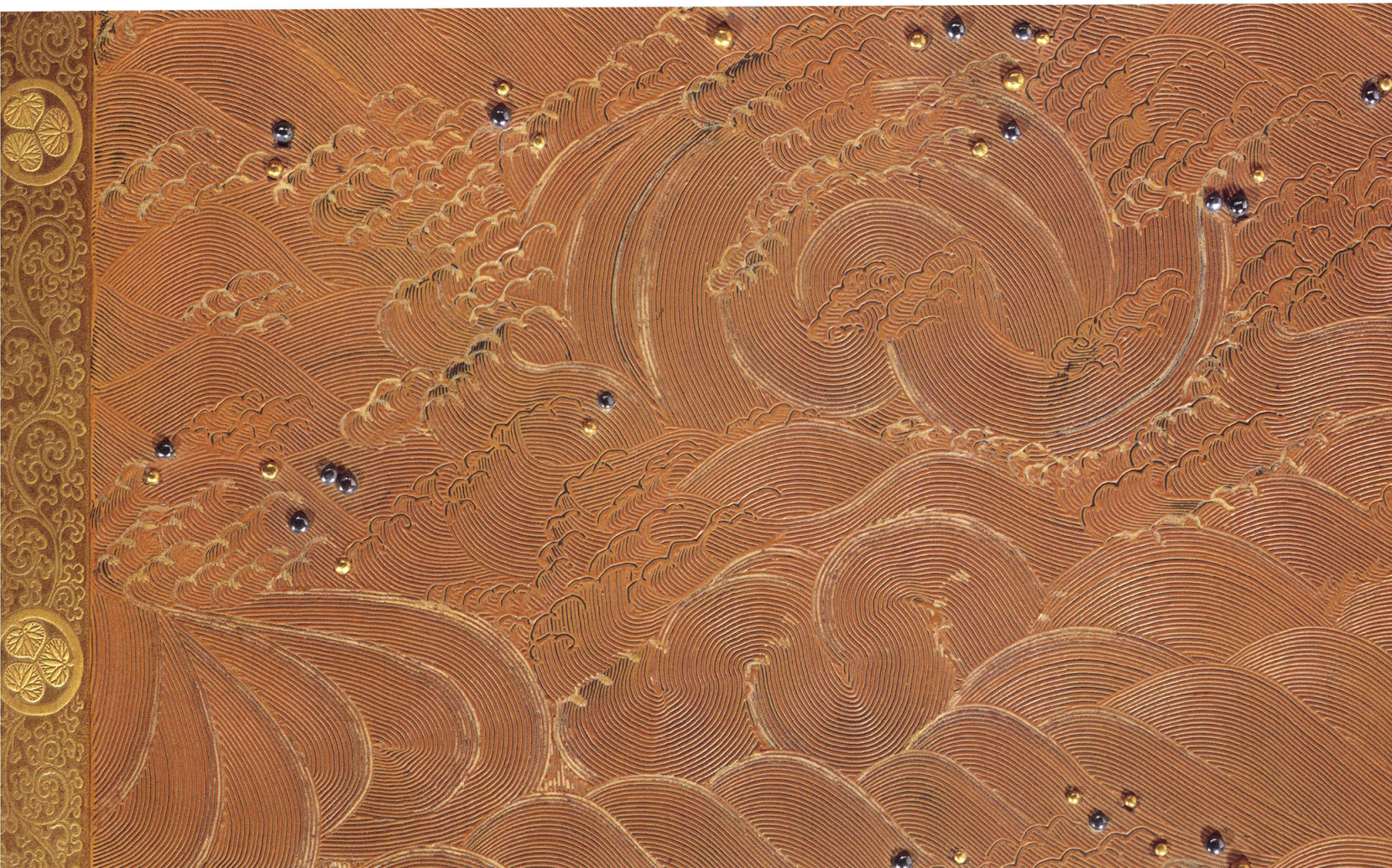
二七・〇×二一・〇×五・七

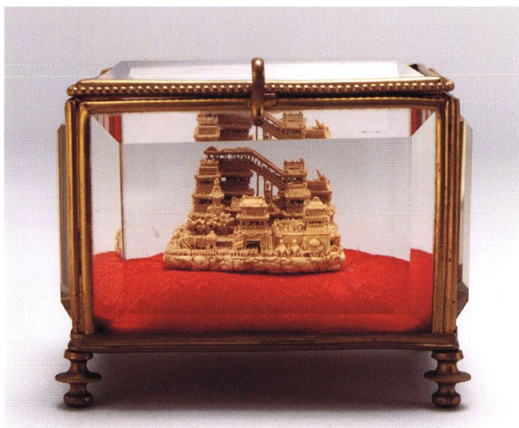
江戸時代(十七世紀)

水戸の黄門様として知られる水戸藩第二代藩主、徳川光圀(一六二八―一七〇二)遺愛の硯箱である。青海波塗と呼ばれる技法により、蓋表に黄漆、側面には黒漆を用いて、波が逆巻き、翻る様を表した硯箱で、波の飛沫には金銀の銚を用いている。青海波塗は変わり塗の一種で、卵白などを混ぜて増粘した漆を塗り、乾く前に筋目を付けたへらなどで引き掻いて、波文様を表している。元禄年間(一六八八―一七〇四)頃の名工、青海勘七が考案し、得意とした技法という。本作に銘はないが、青海波塗による巧みな表現や制作年代から勘七作と伝えられており、貴重な作例である。

蓋の削面は金地とし、葵紋と唐草文を蒔絵で配している。箱の内側は朱漆塗とし、蓋裏に金蒔絵で光圀の書を表しており、「瀾翻硯海、墨興玄雲、四友一室、云以輔文」とある。硯で墨を擦る様を海の波濤や湧き上がる黒雲の景観に例え、文房具(四友)の重要さを詠じたものか。梅里は光圀の号、子龍は字である。この詩文は、光圀の生前にすでにまとめられていた漢詩集『常山文集』(享保三年精撰)に硯銘として収録されている。水滴は赤銅製で雲文を表し、「潭雲」の文字が金銀で象嵌されている。このような青海波塗の意匠、内部の仕立てには、光圀の趣向が強く反映されていると推察される。

明治三十三年十一月、明治天皇は近衛師団演習を御覧のために茨城県笠間に行幸された。この折、光圀に正一位を追贈し、その墓所瑞龍山に侍従を勅使として遣された。この謝恩として、水戸徳川家第十三代徳川圀順より同年十二月に献上された品である。明治天皇は、記念として永く愛玩すべき旨を圀順に伝えられたという。





10 象墜 小島彤山

牙彫

三・五×五・〇×二・八

文政六年（一八二三）

象墜とは、象牙で造った根付のことを意味する。本作の造形について、頼山陽（二七八〇～一八三三）が詳細に記した「象墜記」（作品番号11）が添えられており、これにより象墜の名称がある。

この根付の主題は、中国は唐代の小説『枕中記』より、盧生という青年が、思いのままに出世できるという枕を道士から借りて寝たところ、栄華栄達の一生を送る夢をみる、という情景を表している。本作では、雲上に楼閣がそびえており、向かって左側の城壁の脇に、団扇をもって眠る盧生がひときわ大きく彫り表され、その枕の穴から雲がわき出ている様子が見える。枕元には人馬の列、飾りを付けた象があり、正面の不老門からは、人の列が幟や旗を立てて出門している。楼閣の各部屋ではさまざまな遊興が繰り広げられており、「象墜記」によれば、人は八百八十人、馬や象は十二頭が表されているという。底面には、雲間に蝙蝠が飛び交う様が彫られ、紐を通す穴が二つ開けられており、左下に「文政癸未秋彤山小島旭」とある。掌に納まるほどの小さな象牙材に、壮大な情景を凝縮しており、その精緻を極めた細密表現は驚異といえる。

作者の小島彤山（二七九四～一八四五）は、『平安人物志』（文政五年版）にも登場しており、細密彫刻や篆刻を良くした人物である。本作は彤山三十歳の作品。彤山と山陽は篆刻や硯、琵琶の演奏などを通じて親交が深かったという。

本作は「象墜記」に浦井氏蔵と記されているが、おそらくは明治初期までに「象墜記」とともに旧有栖川宮家に伝来し、後に旧高松宮家に引き継がれた。有栖川宮熾仁親王ならびに威仁親王、高松宮宣仁親王は日本美術協会の総裁を務められていたこともあり、「象墜」は昭和七年に日本美術協会展覧会で展示され、さらには同年の『日本美術協会報告』第二五号に相見繁一（香雨）による「象墜を拝観して」が掲載され、世に広く知られることとなった。なお、付属のガラスケースは、同様のものが旧有栖川宮家旧蔵品の他作品にも見られることから、明治期に宮家で調べられたものと考えられる。





原寸大



眠る盧生の枕の穴から、
雲がわき出る。



底面

象墜記

平安浦丹代所歲象墜彫虛生
夢園丹後小島莊山生作生天資工雕
鏡自欲試其手眼之力回造此墜、
表一寸近加五分高如之為樓閣
十有四為八、八十人為馬象十二
正為廣一為楹八九楹為禽四五十集
驟視如蟻集腐葉諦視如種、可
辨云清余心之記余聞而不為信且
方按舊著外史未既也乃今齊業不
而觀之生在於羨臨眉領宛然
北邊色露出微南前騎及從樓樓後
紛中擁我與四十六騎之導以樂玉
一大門、扁不老隸字者皮板肉到
門傍百未拜逾陳列玉鞍飾象左有
難樓、門之際高設幔幕列縣、教
鐘門內三殿中者越閣道扉之門樓
其下不穿門人馬往來去者為長生
厦、似玉浮園、香不擁之厦、樓
閣畫畫景後一三閣兩層皆沒燈座
擊珍玩列侍肉控者數百人、閣尤張
筵一伶方舞蘭凌王奮袖相之鼓
者、金兵笛者、華、葉者、環之由
廡下觀者五十餘人、閣右有堂兩階
懸燈屏、姬扶墨持花、近、曲房、
浸園池、位置、楹、石、樓、禽、臥、鹿、房、中
有拂簪了而上樓、書、机、瓶、壺、整、然、有
雅、穴、畫、十、展、書、畫、者、衆、首、評、者、揮
毫、者、立、題、屏、者、捧、硯、侍、女、樓、又、一、層
首、圍、棋、者、傍、觀、者、遊、而、看、書、者、倚
窗、對、話、者、又、一、層、露、臺、西、之、列、盆

①

最甚後稍高、爰置潭、儀、風、年、類
其前、遊、聖、梯、如、虹、蜿、延、而、上、美、人
尊、容、至、景、高、樓、左、右、又、夾、以、露、臺
從、椅、眺、遠、裙、帶、縹、渺、臺、下、構、樓
各、兩、層、相、通、而、以、一、大、樓、臺、之、上、層
之、左、為、詩、筵、几、拾、書、憑、欄、撥、續
而、處、其、下、層、之、左、佳、人、醉、舞、穿、吹
蕭、拍、板、而、右、數、實、彈、琴、飲、酒、如、逃
喧、者、其、間、隔、以、重、欄、置、冊、板、二、盆
下、至、大、樓、則、醉、客、襟、背、杯、盤、狼、藉
沒、桌、三、名、珠、以、椅、詞、飲、掃、戰、行、酒
執、筴、極、老、狀、態、而、樓、下、居、獨、舞
筵、也、由、廡、上、又、有、樓、三、層、直、空、梯
云、拼、左、又、起、三、樓、則、跳、門、內、三、厦
矣、每、樓、有、空、安、每、十、其、佳、擇
有、條、理、如、此、而、宮、眼、斗、拱、插、柱、柱、礎
製、也、各、結、楠、必、方、天、必、圓、天、或、雕、龍、若
龍、合、麟、眠、水、皆、備、瓦、際、時、有、朱、雀
去、顧、嗔、噴、一、乳、雀、雜、葉、而、飛、其、項
屑、不、遺、如、此、余、眼、不、能、親、以、誌、健、純、明
既、之、又、極、生、在、側、指、說、稍、得、好、之
嗔、信、矣、按、之、至、於、此、也、有、空、向、觀、談
曰、按、難、妙、哉、得、免、無、益、乎、何、必、以、寸
許、物、備、此、種、而、生、生、又、為、之、記、為、余
曰、不、然、余、侯、外、史、後、彼、史、洋、國、某、叙
我、錄、倉、以、未、典、廢、之、其、其、事、願、大
不、得、多、也、然、以、地、球、圖、極、之、亞、細
亞、諸、國、不、能、掌、大、至、於、我、移、以、指、
之、蔽、而、不、見、此、象、墜、至、小、矣、而、數
十、萬、雄、豪、傑、對、千、軍、萬、馬、山、其
骨、河、之、血、以、爭、此、指、大、之、物、當、其、得
志、城、關、連、空、宮、宇、障、日、姬、美、駒

②

11 象墜記

賴山陽

一巻

純本墨書
本紙二〇・一×二五〇・三
文政十年(一八二七)

「象墜」(作品番号10)とともに伝えられてきた頼山陽(一七八〇〜一八三三)による記文である。「象墜記」には、これとは別に「形山生妙於彫刻所造象墜」で始まるものがあり、「頼山陽全書(昭和六年)では、本作を初稿、別文を定稿としている。初稿とされる本作の方が彫刻の細部について詳述している。

拡大鏡で見ても、その全容を捉え難いほど細微な「象墜」を、山陽は形山の解説を受けながら鑑賞し、彫り出された情景を物語っている。「象墜」が制作されて四年後のことである。巻末には山陽が没して七年後に、小石元瑞(一七八四〜一八四九)が天保九年(一八三八)に記した跋文がある。

山陽は『日本外史』『日本樂府』『日本政記』などの史書を著したことで名高く、その史観は幕末の尊皇攘夷派の志士たちに大きな影響を与えた。京都を本拠として、多くの文人と交わり、詩文や書画を数多く遺した。

なお、昭和前期に本作の写本二巻、版本一帖が高松宮家に献上されている。写本のうち一巻は日本美術協会会頭を務めた中田敬義が昭和六年に献上したもので、もとは古河市兵衛が所持し、次代の潤吉より敬義が譲り受けたという。もう一巻は田中光頭が所持していたもので、大正十三年頃に敬義が譲り受け、その後、高松宮家に入ったと考えられる。この二巻の写本は、毎行の文字数に違いはあるが、内容は正本と一致している。ただし、奥書について、田中家伝来本は「文政十年歲在丁亥春。仲廿又五日」とあり、本は「文政十年歲在丁亥秋。仲廿又五日」とある。

版本は「頼翁真蹟象墜帖」として明治三年(一八七〇)に儒学者、加藤桜老(一八一〜一八四)が版行したもの。正本を模刻しているが、跋文の一部に正本と差異がある。昭和十三年に相見香雨より献上された。

從如雲如雨而不過就指大中為之
而後世津談之屑叙之無形山
彫之矣鼎而全候史二十餘年累
三十萬言而不能悉舉形山乃取
寸許物備此其象象固寥寥已
畢其數乃爾亦可以不記也且夫
世人之胸於功名富貴以功名富貴
高且大不能眇視之也五十年物
相其氣籠蓋天下不過一夢寐
使此夢也自至人主眼蔽之如蝶集
腐葉耳是之以曉世矣形山之
雖有浦升子之歲焉烏知其意
之不在於此哉何曰無益不可以不
記也於是乎記

天保十年
歲在丁亥春仲月
又五日山陽外史賴襄撰并書
于鴨河草堂山紫水明處

形山之於刀戲雖安公輸併成一而山陽
形以天下名手為之記叙事精密議論
縱橫實兼韓蘇之長可謂刀與筆實
絕矣宜哉浦井主人寶愛不措也今也朝
逝七年矣又得重讀在卷日久則不知
此筆法不可後也亦能健獨在筆者
刀者皆得親視則亦既老矣不可以
無題也乃書

天保九年季夏十六日
小石龍謹題



① 象壁記

平安浦井氏所藏象壁彫盧生
夢因丹後小島形山生作生天資工雕
鑄自欲試其手眼之力因造此壁
袤一寸延加五分高如表為樓閣
十有四為人八百八十人為馬若象十二
匹為鹿一為樹八九株為禽四五十隻
驟視如蟻集腐葉諦視則種々可
辨云請余作之記余聞而不為信且
方校旧著外史未暇也乃今卒業取
而觀之盧生在榻美睡眉鬚宛然
枕辺忽露出儀衛前騎後從旗幟續
紛中擁彩輿四十夫昇之導以樂至
一大門々扁不老隸字為之波撒周到
門傍百吏拜迎陳列玉輅飾象左有
譙樓々門之際高設幔幕列果鼓
鐘門内三殿中者起閣道屬之門樓
其下又穿門人馬往來右者為長生
殿々側有浮囡喬木擁之殿後樓
閣重壘最後一巨閣兩層皆設帷座
擊珍玩列侍周旋者數十人閣左張
筵一伶方舞蘭陵王奮袖頓足鼓
者鉦者笛者笙者箏者環之曲
廡下觀者五十餘人閣右有堂兩階
懸燈群姬挾琴持花迎入曲房々
後園池位置樹石樓禽馴鹿房中
有梯攀而上樓書机瓶罇整然有
雅容數十展畫者聚首評者揮
毫者立題壁者捧研侍者樓又一層
有圍棋者傍觀者避而看書者倚
窓對話者又一層露台匝之列盆

各兩層相通而以一大樓受之上層
之左為詩筵隨几按書憑欄撚鬚
而虛其右下層之左佳人醉舞客吹
簫拍板而右數客彈琴飲酒如逃
喧者其間隔以重欄置珊瑚二盆
下至大樓則醉客裸杳杯盤狼藉
設桌三各環以椅開飲拇戰行酒
執爻極尽狀態而樓下即嚮舞
筵也曲廡上又有樓三層直雲梯
右梯左又起三樓則踞門内三殿
矣每樓有客々每數十其結構
有条理如此而窓眼斗拱欄楯柱礎
製作各殊摘必方瓦必凹瓦或雕龜若
龍介鱗眼爪皆備瓦際時有數雀
相顧啾噴一乳雀離巢而飛其瑣
屑不遺如此余眼不能親以鑿鑿就明
曉之又聽生在側指說稍得弁之
曉信矣技之至於此也有客同觀咲
曰技雖妙哉得非無益乎何必以寸
許物備此種々而先生又為之記為余
曰不然余修外史做彼史漢國策叙
我錄倉以乘典廢之跡其事頗大
可謂有益也然以地球因按之亞細
亞諸國不能掌大至於我邦以指々
之蔽而不見比比象壁更小矣而數
十英雄豪傑闢千軍萬馬山其
骨河其血以爭此指大之物當其得
志城闕連空宮宇障日姬妾驕

高且大不能眇視之也五十年將
相意氣籠蓋天下亦不過一夢籍
使非夢也自至人巨眼觀之如蟻集
腐葉耳是足以曉世矣形山之
雕焉浦井子之藏焉烏知其意
之不在於此哉何曰無益不可以不
記也於是乎記

文政十年歲在丁亥春仲月
又五日山陽外史賴襄撰并書
于鴨河草堂山紫水明處

形生之於刀戲雖安公輸併成一而山陽
翁以天下名手為之記叙事精密議論
縱橫實兼韓蘇之長可謂刀与筆双
絕矣宜哉浦井主人寶愛不措也今也翁
逝七年生又得重讀在藤日久刀則不知至
此筆決不可復起也予鈍健獨在筆者
刀者皆得親視則亦既老矣不可以
無題也乃書

天保九年季夏十又八日
小石龍謹題

小石龍謹題

② 花台後稍高處置潭潭儀風竿類

其前起雲梯如虹蜿蜒而上美人
導客至最高樓々左右又夾以露台
設椅眺遠裙帶縹緲台下構樓

③ 從如雲如雨亦不過就指大中為之

而後世津談之屑叙之與形山
彫此奚異而余修史二十余年累
三十萬言而不能悉舉形山乃取
寸許物備此方象數閱寒暑即
畢其數乃爾不可以不記也且夫
世人之眩於功名富貴以功名富貴為

象墜記写本(田中家伝来本)
紙本墨書 本紙一〇・七×二八九・三

平安浦井氏所藏象墜彫盧
生夢圖丹後小島形山生作生
天濱工雕鑿自欲試其手眼
之力因造此墜、表一寸延
加五分高如表為樓閣十
有四為人八百十人為馬若
象十二匹為鹿一為楸八
九株為禽四五十隻驟視如蟻
集腐葉諦視則種之可辨
云清余心之記余聞而予為信
且方按舊著外史未暇也
乃今存業取而觀之官生

集腐葉耳 是足以曉世矣
彫山之雕寫浦井 予之藏焉
烏知其意之不在於此哉何
曰無益不可以不記也於是乎記
文政十年 歲在丁亥春仲
廿五日山陽外史賴 襄撰
再書于島河草堂山紫
水明家

卷頭

卷末

象墜記写本(古河家伝来本)
紙本墨書 本紙一〇・六×二四三・三

平安浦井氏所藏
盧生夢圖丹後小島形
作生天濱工雕鑿自欲試其
手眼之力因造此墜、表一
寸延加五分高如表為樓
閣十有四為人八百十人為
馬若象十二匹為鹿一為楸
八九株為禽四五十隻驟視
如蟻集腐葉諦視則種之
可辨云清余心之記余聞
而不為信且方按舊著外
史未暇也乃今存業取而觀
之官生在榻表臨有信宛
然批遠靈露出俄南前弱

某耳 是足以曉世矣
山之雕寫浦井 予之藏焉
烏知其意之不在於此哉
何曰無益不可以不記也於是乎記
文政十年 歲在丁亥
秋仲廿五日山陽外史賴
襄撰再書于島河草
堂山紫水明家

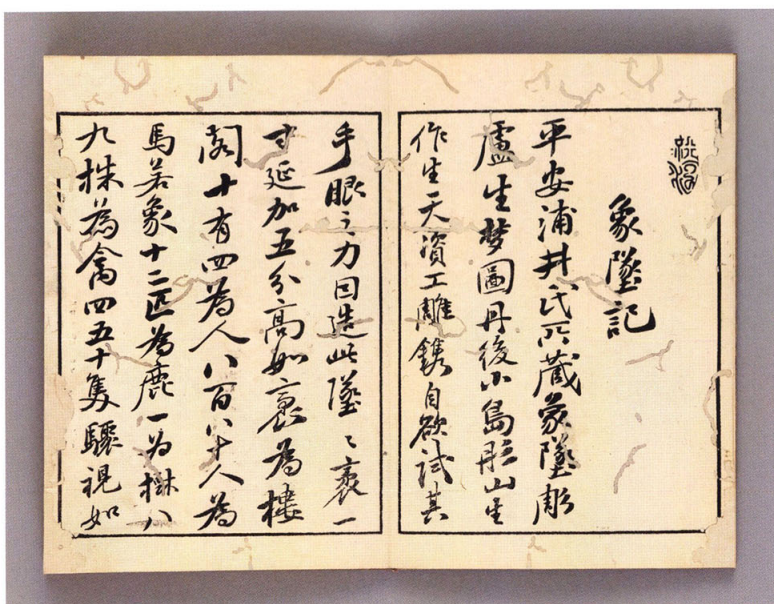
卷頭

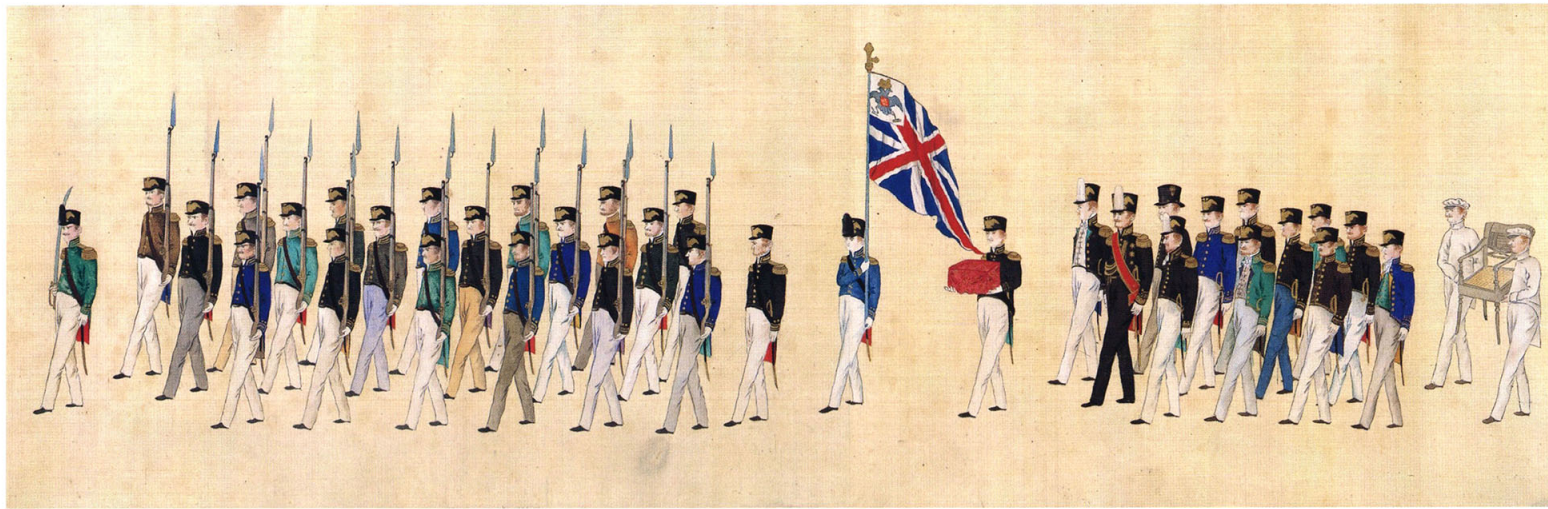
卷末

象墜記 版本 明治三年版
表紙一八・〇×二二・一

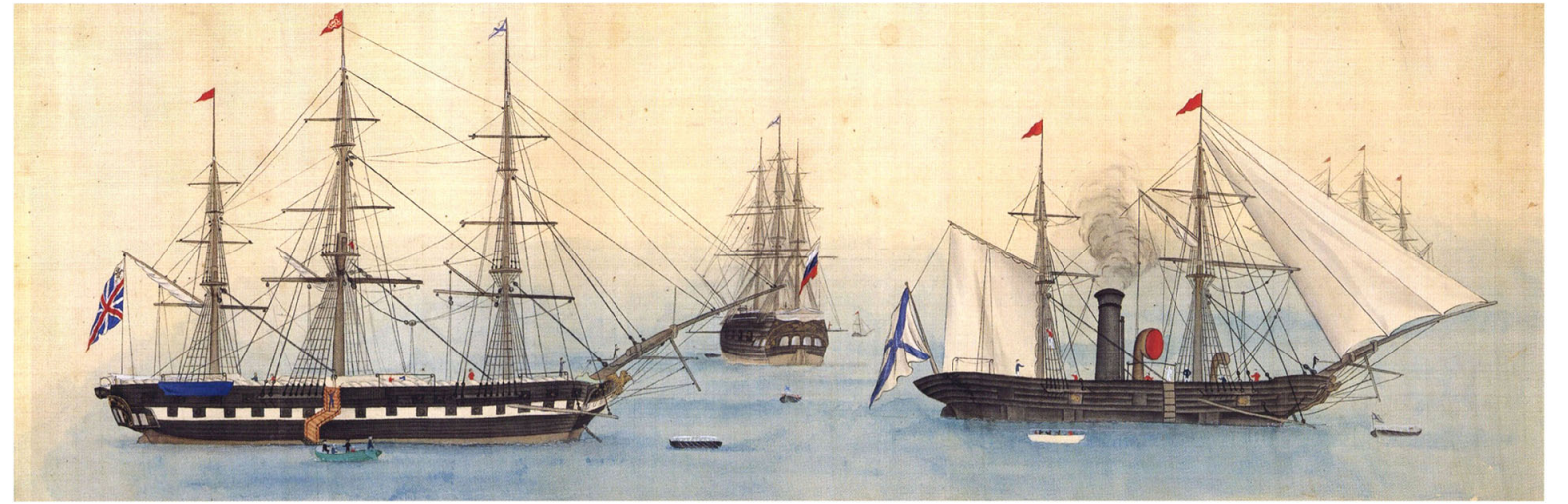


表紙

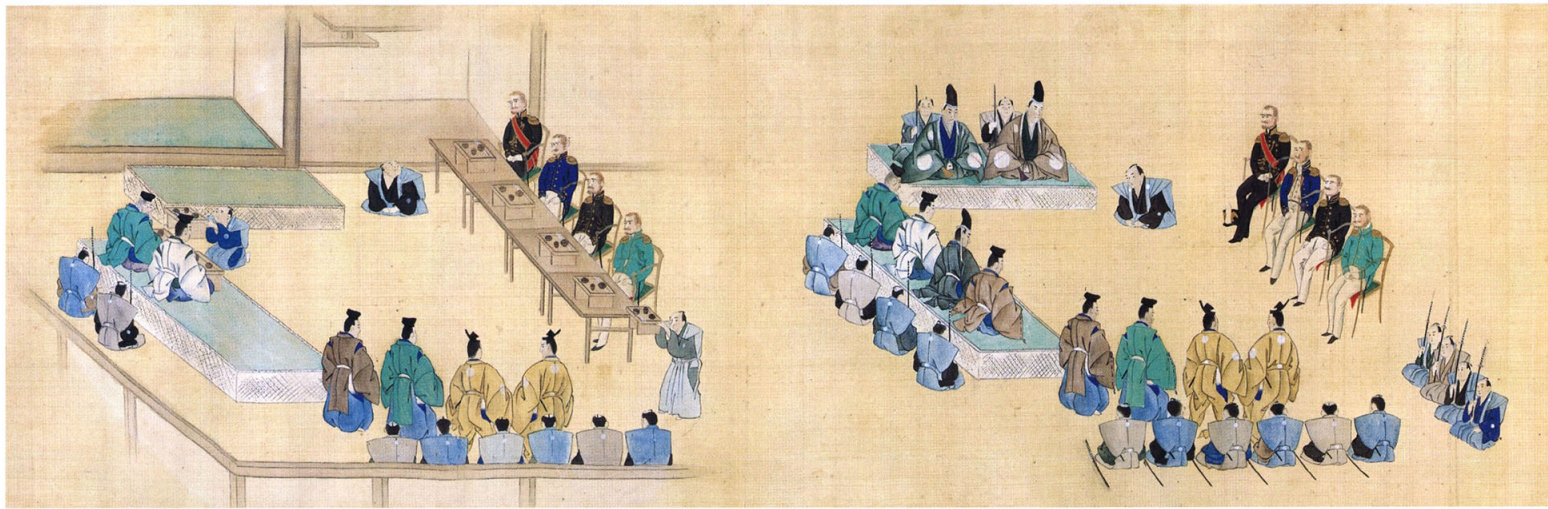




鼓笛隊を先頭にしたプチャーチン一行の行列

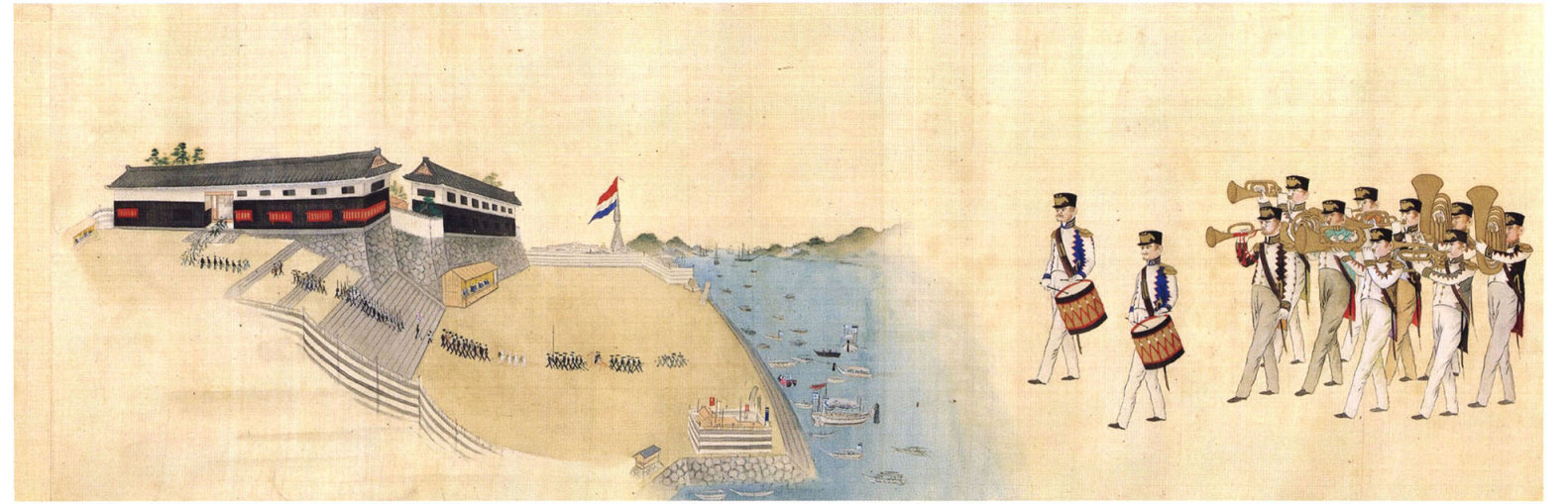


海上に浮かぶ四艘のロシア艦隊



三汁七菜と酒が饗される

椅子に着座するロシア側と畳に座る日本側



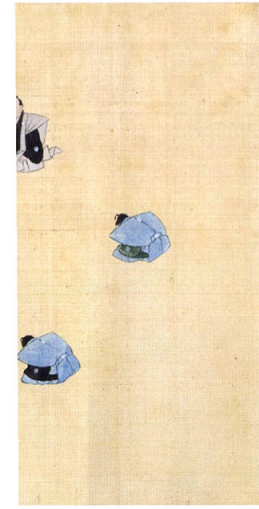
長崎奉行所へ隊列を組んで入門していく一行



プチャーチン(右)と副官兼通訳官ボシェット(左)

日本側からロシアの要求に対する返書が渡される

プチャーチンらへ真綿や紅白の綸子が贈られる



嘉永六年(一八五三)六月にアメリカ合衆国使節としてペリーが浦賀へ、そして七月にはロシア国使節プチャーチンが長崎へと立て続けに来航した。いずれも日本に通商開始を要求することが目的であり、さらにロシアは国境の画定も日本へ要求した。本絵巻は、このプチャーチン長崎来航の様子を描いたものである。鼓笛隊を先頭にした行列の場面では、プチャーチンの前方に国書を捧げ持つ隊員、最後尾には着座用の椅子を運ぶ隊員の姿が描かれている。プチャーチンらと大目付筒井肥前守、勘定奉行川路左衛門尉らが奉行所内で初対峙する場面では、椅子に座る相手となるべく目線をそろえようと、日本側は特別に高く設えた二畳台に着座している。ちなみに、このプチャーチン長崎来航を描いた絵巻は、図様が共通する異本が複数存在しており、異国船の来航がいかに関心をもく題材であったかがうかがえる。

箱書によれば、作者は田川玉巖という画家であり、ある人物の秘藏品であったものが、本絵巻を献上した石川恒年(一八六四〜一九四五)の手に渡ったという。明治四十四年十一月の明治天皇九州ご巡幸の際には、久留米の行在所において天覧に供されたとも記され、昭和の大札を祝して、石川本人より献上された。石川は、福岡出身で音楽取調所、東京図画専修学校で学び、一時は夏目漱石と同じ愛媛の松山中学で図画の教師をつとめた人物である。

金
ブキャナン大統領肖像・径七・六 三六六グラム
ワシントン大統領肖像・径五・三 一五三グラム
一八六〇年



表面

表面の文字: JAMES BUCHANAN, PRESIDENT OF THE UNITED STATES.
(肖像の下) S.ELLIS .SC.

裏面の文字: IN COMMEMORATION OF THE FIRST EMBASSY FROM JAPAN TO THE UNITED STATES 1860.
(楯の下) Paquet.F.



裏面 原寸大



表面

表面の文字: GEORGIUS WASHINGTON PRAES. PRIM. RER. CONF. AMER. MDCCLXXXIX
(肖像の下) LOVETT PHILA.

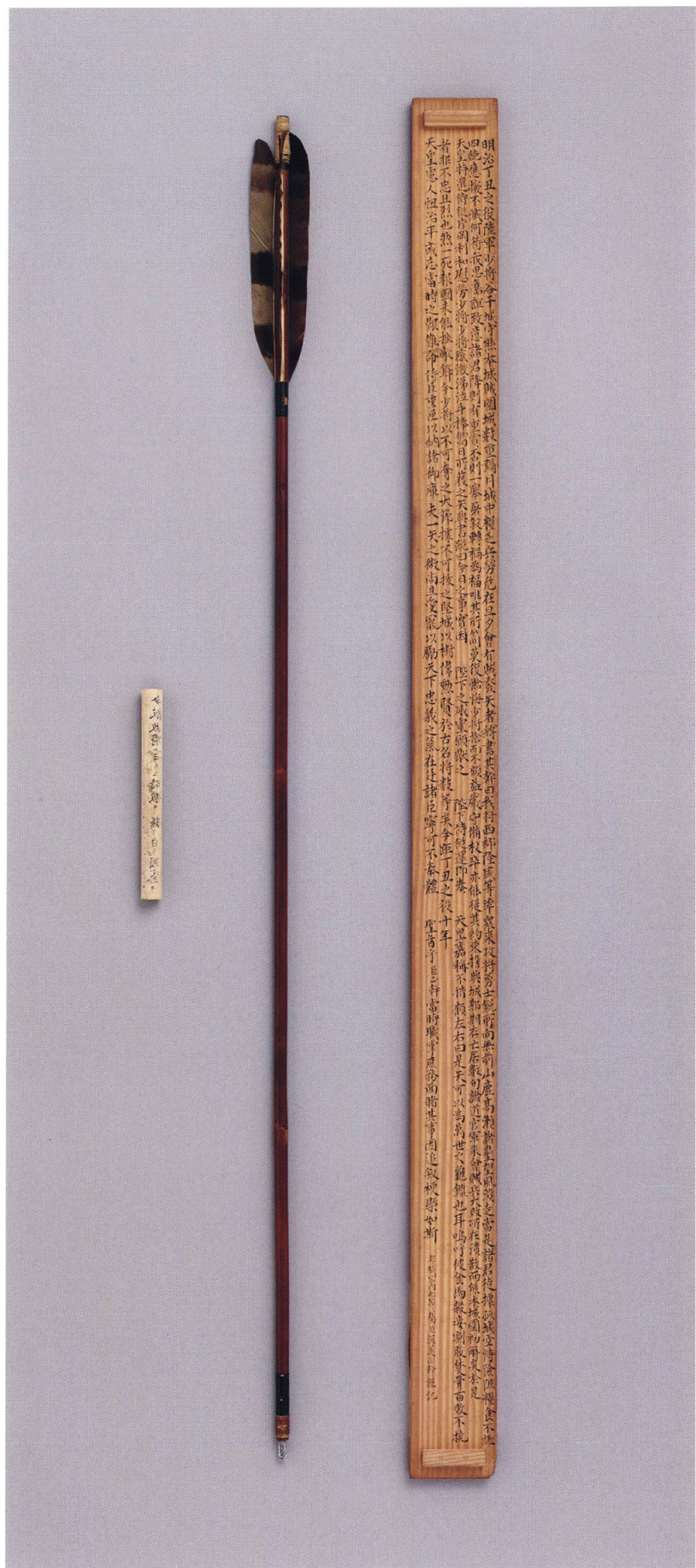
裏面の文字: TO THE JAPANESE EMBASSY FROM BAILEY & CO. JEWELLERS, PHILADELPHIA. 1860



裏面 原寸大

ペリー提督の二度目の来航により外交政策の見直しを迫られた幕府は、一八五四年(嘉永七)に和親条約、一八五八年(安政五)に修好通商条約を米国と結んだ。批准書の交換はワシントンで行うとされたため、使節団を初めて正式に派遣することとなった。いわゆる万延元年遣米使節である。外国奉行であった新見正興(一八三二〜六九)が正使に任命され、副使は村垣範正(一八三三〜八〇)、監察に小栗忠順(一八二七〜六八)が選ばれ、この三名を正規の代表として使節団が生まれ、一八六〇年二月に米艦ポーハタン号と咸臨丸に分乗して海を渡った。五月二十三日(万延元年四月三日)にワシントンで批准書は無事に交換された。その後、ワシントンを離れるに際して六月五日にホワイトハウスでブキャナン大統領に二回目の謁見をした折り、正使、副使、監察の三名に大統領から金のメダルが記念の品としてそれぞれに手渡された。本品(34頁)は、この正使、副使、監察のいずれかが受けた金のメダルであるが、誰が受けたものかは伝来に残されておらず、不明である。なお、同じ型による銀のメダルが士官級の随員宛に二十個、銅のメダルが家司従僕までの随員宛で五十個が国務省においてキャス国務長官より渡されたという。これらはフィラデルフィアの造幣局で制作されたもので、表面にブキャナン大統領の肖像があり、裏には縁に櫛の枝文が抱き合わせに表され、中央に英文による記念句が配されている。

一方の小さな方のメダル(35頁)は、初代大統領ワシントンの肖像を表したもので、使節団がワシントンを離れた後、フィラデルフィアに滞在中に、同地の宝石商ベイリー商会より日本の使節に贈られた記念のメダルである。ブキャナン大統領肖像の記念メダルとともに、一つの箱に納められて伝えられてきた。いずれも、日本の外国奉行(大使)が米国の地で初めて外交の舞台を踏んだ、その歴史的事実を示す貴重な品である。



14 西南戦争熊本城矢文・征矢

二点

紙本墨書、竹、羽

矢文・一三・二×一八・五 矢・長八六・五

明治十年（一八七七）

明治十年（一八七七）三月、西南戦争の折り、熊本城に籠城する政府軍に対して、西郷軍より放たれた矢と、そこに結び付けられた矢文である。矢は鏃に近い部分の途中で折られているが、これがいつ折られたものかは明らかでない。矢文は籠城する兵士たちの不安を募らせ、投降をうながす内容となっている。矢羽の間にも降伏を勧める墨書がある。

城の西側に隣接する小高い丘、段山^{だんやま}は西郷軍からの攻撃を激しく受けた場所である。『熊本鎮台戦闘日記』（明治十五年）によれば、三

月十日、段山の西郷軍より城に向かって矢文が発射され、その同文が線外の見やすい各所に掲示されたという。『熊本鎮台戦闘日記』掲載の矢文と、この矢文とは一部に語句の違いはあるが、内容はほぼ一致している。

熊本城の籠城戦を率いたのは、熊本鎮台司令長官谷干城^{たにたてき}であった。二月二十二日に西郷軍の強襲をうけ、四月十四日に包囲を解かれるまでの五十余日にわたり、谷は籠城に耐えた。西郷軍が屈強な土族兵を中心としていたのに対し、始まってまもない徴兵制によって集められた兵士をまとめ、兵糧も限られるなかで城を守り通したその功績は、政府にとって計り知れないものがあった。明治天皇は四月、侍従片岡利和を遣わして各戦地を慰労されたが、矢と矢文はこの折りに谷が片岡侍従を通じて献上したものである。収納箱の蓋裏には当時宮内七等属にあった渥美正幹により本品の由来が記されている。

矢羽の間に記された墨書

「おふえんは皆うちやふれり籠城の者共兵器をすて、くたり来たらは命をたすくる者也

熊本隊中



箱蓋裏の墨書（は改行を示す）

「明治丁丑之役陸軍少将谷干城守熊本城賊围城数重弥月城中糧乏兵勞危在旦夕会有賊發矢者縛書其幹曰我将西鄉隆盛等率衆來攻將勇士銳所向無前山鹿高瀬諸望風潰走当是時諸君徒視孤城空恃險阻糧不繼四絕庇援不滅何待我思旧誼致意諸君降則有重賞否則一葦屠殺轉禍為福唯其所簡莫復貽悔少將捨而不顧益嚴守備校卒亦能從其約束担与城郭期存亡居数旬諸道官軍來会賊兵大敗所在潰散而熊本城围初解矣於是天皇特遣侍從片岡利和慰勞少将少将感激涕泣手捧誓日所獲之矢与書跪曰今日之事実因陛下之威靈願献之陛下侍從還即奏天皇嘉称不措顧左右曰是矢可以為万世之龜鑑也耳嗚呼彼食馬殺妾割股焚骨百敗不撓者非不忠且烈也然一死報國未能挫敵鋒今少将以不可奪之大節擬不可拔之堅城以樹偉勲賢於古名将数等矣今距丁丑之役十年天皇慮人忸治平或忘当时之艱難命侍臣重匣以納諸御庫夫一矢之微尚且愛寵以励天下忠義之氣在廷諸臣寧可不奉体聖旨乎臣正幹當時職掌庶務面睹其事因追叙梗概如斯非職宮内七等属臣渥美正幹謹記」

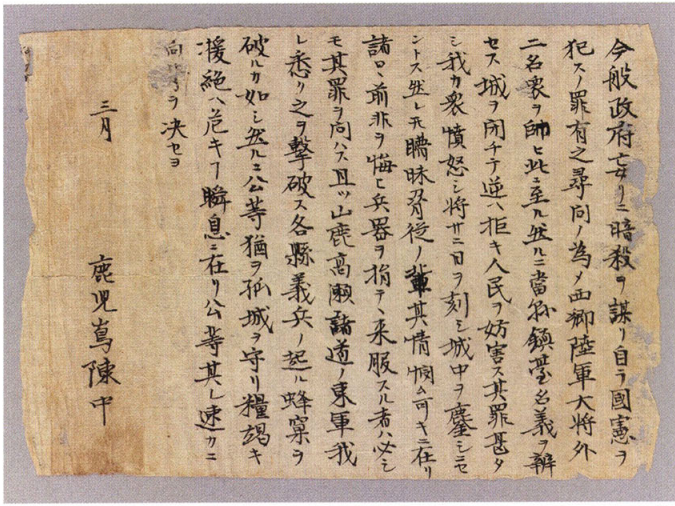
矢文

「今般政府妄リ二暗殺ヲ謀リ自ラ国憲ヲ

犯スノ罪有之尋問ノ為メ西郷陸軍大將外二名衆ヲ帥ヒ此ニ至ル然ルニ当県鎮台名義ヲ弁セス城ヲ閉チテ逆ヘ拒キ人民ヲ妨害ス其罪甚タシ我力衆憤怒シ将サニ曰ヲ刻シ城中ヲ鑿シニセントス然レトモ矇昧脅從ノ輩其情憫ム可キニ在リ諸口、前非ヲ悔ヒ兵器ヲ捐テ、来服スル者ハ必シモ其罪ヲ問ハス且ツ山鹿高瀬諸道ノ東軍我レ悉ク之ヲ撃破ス各県義兵ノ起ル蜂窠ヲ破ルカ如シ然ルニ公等猶ヲ孤城ヲ守リ糧竭キ援絶ヘ危キコト瞬息ニ在リ公等其レ速力ニ向背ヲ決セヨ

三月

鹿見島陳中



三月

鹿見島陳中





蒔絵卓の部分



15 水晶玉蟠龍置物

一組

水晶、銀・鍍造、木製漆塗・蒔絵
 総高一〇〇・〇 水晶玉径一六・四
 明治十二年（一八七九）

この水晶玉は、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会に政府により出品され、翌年フランス郵船ニール号によって日本に還送される途中、三月二十四日に伊豆沖で船とともに沈没し、後年引き揚げられたものと伝えられる。『水晶宝飾史』甲府商工会議所、昭和四十三年）によれば、維新直後に山梨県御岳昇仙峡で掘り当てた大きな原石から、名工塩入寿三らが四年をかけて制作、御岳の金桜神社へ奉納した水晶玉がこれに当たる。御岳昇仙峡は水晶の原石を産出したことで知られ、明治中頃までは生産量も多く、海外にも輸出されていた。明治十一年に明治天皇が御覧になったのを機に金桜神社より皇室に献上された。この後に、宮内省が銀製の蟠龍、蒔絵卓を精工社に制作を依頼し、置物として完成したのが、明治十二年のことである。

精工社は、殖産興業の一環として美術工芸の振興が図られた明治初期の社会的背景の中から、明治十年頃に民間に設立された工芸品の生産会社である。宮内省の制作依頼を数多く受けており、金工品や漆器を主として生産して明治三十年代末までは存続していたようである。創立者の一人で、後に図案の分野で帝室技芸員となる岸光景（一八四〇～一九三三）が同社の図案の多くを手がけた。蟠龍の玉受け台は銀製で、五爪の龍を象っている。蛸型により精密に製造され、目や炎の部分に金を象嵌して、毛彫りで細部を仕上げている。『建築工芸叢誌』第八号（大正元年）によれば図案は岸、下図はその父の雪浦、鍍造は金龍齋寿道、彫金を塚田秀鏡（一八四八～一九一八）が担当したという。蒔絵卓についても岸の図案によるものであろう。甲板は研出蒔絵で雲と逆巻く波濤を表し、座の各側面と脚部には正倉院宝物に範を得たと思われる宝相華や瑞雲、鳥や蝶の文様を各種の貝板による螺鈿、貴石の象嵌で華やかに仕上げられている。「松風齋桃船」の銘があり、精工社の囑託を受けていた蒔絵師渡辺桃船による。

海中から引き揚げられた水晶玉とそこに取り合わされた龍と波、正倉院宝物の意匠。その伝来や造形のおもしろさに加え、明治初期の工芸制作にまつわるさまざまな様相を示す置物である。



16 ジャボンの製蒔絵菓子器

二点

ジャボン果実皮、蒔絵

大・一・七×一・二・三×七・五

小・九・七×一・〇・一×六・六

明治後期(二十世紀)

柑橘類のなかでもひときわ大きい、ジャボン(ザボン、朱欒とも)の果の内側を剥り貫いて乾燥させた外皮を素地として、蒔絵を施した菓子器。二点のうち、やや大きい方には朝顔の垣と鶏が、小さい方には桜花が蒔絵で表される。内側には黒漆を塗り、木製漆塗りの蓋がともなう。

ジャボンの果実皮で漆器を造ることを発案されたのは明治天皇であるという。宮内大臣を務めた田中光顕は、自身が明治天皇から拝領された「御製ジャボン貰入」の製作方法について次のように述べている。「陛下御手製の貰入れである此品は数年前に佐佐木侯爵〔註…もとは高知藩士、侯爵佐佐木高行〕が大きな朱欒を献上すると陛下はその内の実をくり抜かせ給ひ中に薬灰を入れ絹糸にて五箇所を縛り二三年久しき丹精を以て之をお干しになつてカチカチになつた時これに蒔絵を施させられた物である」(『日本漆工会雑誌』一三八号、一四〇号、大正元年)

改めて本作を見ると、紐で縛った跡が何カ所かに見受けられ、結果として器の形も瓜形になっている。先の記事によれば、ジャボンの後は台湾産の巨大な柑橘類で乾燥を試みられて成功、南瓜も試されたが、これは腐つて実現されなかったという。また、展覧会では瓢に蒔絵をした器をお買い上げになっており、これは「聖上陛下は平素手工の御嗜み深くましますれば此品御参考として極めて然るべき物ならんとて特に御用品」に加えられたという。様々な自然素材を用いた工芸品に、明治天皇が深い御興味をお持ちであったことを示す品である。明治天皇に御縁のジャボン製の類品が各所に存在しており、本品もまた、大正元年に昭憲皇太后より雍仁親王(秩父宮)へ、明治天皇の御遺品として引き継がれたものである。



背面

17 鶯鳥卵蒔絵盃

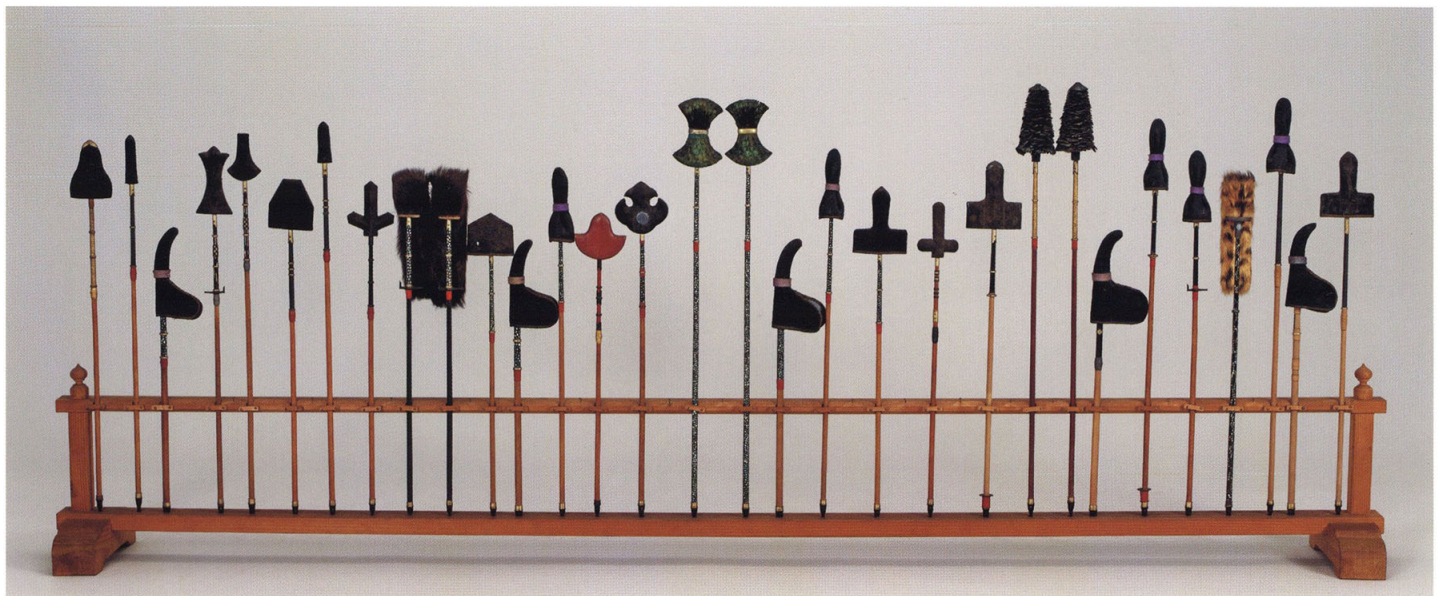
一点

卵殻、蒔絵

径六・八 高八・四

明治後期（二十世紀）

鶯鳥の卵の殻に蒔絵で竹と流水の文様を描いた盃。外側は卵の殻の素地がそのまま見えるように蒔絵され、内側は箔押しで仕上げられている。卵の殻に蒔絵して盃に仕立てる趣向は、ジャボンの果表皮による菓子器（作品番号16）と同じように、明治天皇の御発案によるものであろうか。本作もやはり大正元年に昭憲皇太后より雍仁親王（秩父宮）へ、明治天皇の御遺品として引き継がれたものである。鶯鳥の卵殻を用いた盃や香合の作例も、明治天皇御遺品として明治神宮など各所に保管されている。『明治天皇紀』の明治三十五年五月二十三日には、「侍従長侯爵徳大寺実則に鶯卵をもって製する所の杯五個を賜ふ」とある。明治天皇ご自身、このような趣向、制作をお楽しみになり、周囲の近しい人々へ完成品をお渡しされていたご様子が見えらる。



越後黒川藩 柳澤
 伊勢神戸藩 本多
 伊予西条藩 松平
 駿河田中藩 本多
 信濃飯山藩 本多
 常陸水戸藩 徳川
 紀伊新宮藩 水野
 紀伊田辺藩 安藤
 紀伊和歌山藩 徳川
 美濃今尾藩 竹腰
 尾張犬山藩 成瀬
 尾張名古屋藩 徳川
 徳川(将軍家)

18 旧諸大名槍雛形 山田幾右衛門

四七四点のうち

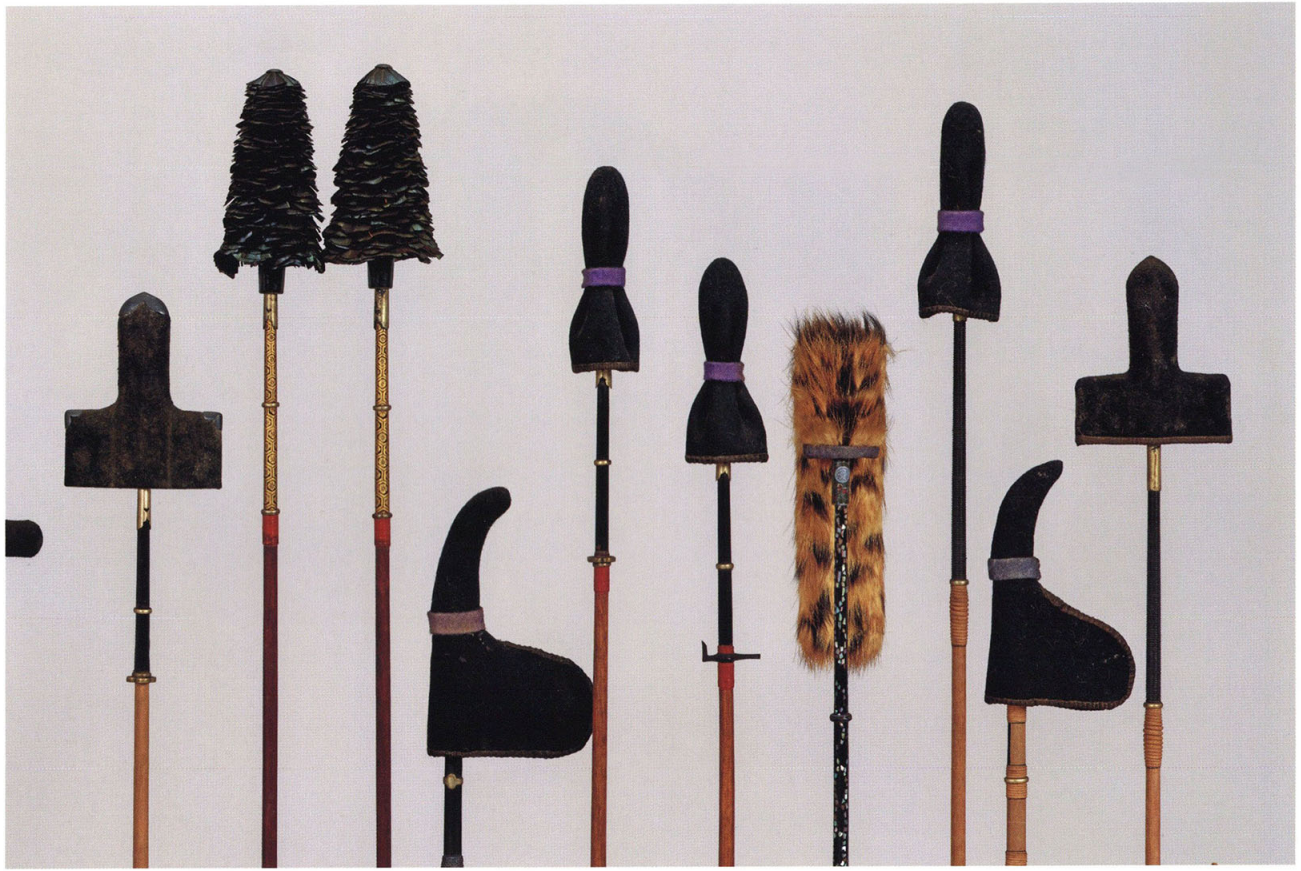
木、漆塗ほか

長三七・七〇

明治十七年(一八八四)

江戸時代、参勤交代の折りに諸大名は、その行列に用いる道具を各家の格式に従って誂え、様々に飾った。本作は、大名行列の道具のうち、藩主の乗物の前あるいは後ろに配置された長刀、槍をおよそ四分の一から五分の一に縮めた雛形に制作したものである。行列道具、伊達道具などとも呼ばれる道具のうちでも、特に、高くかけられる槍とその鞘は、各家を一目で識別できるよう、特徴的な形、素材で造られた。大名家の名鑑でもあり、行列見物のガイドブックでもあった『武鑑』にもこれらの多彩な絵図が記されている。

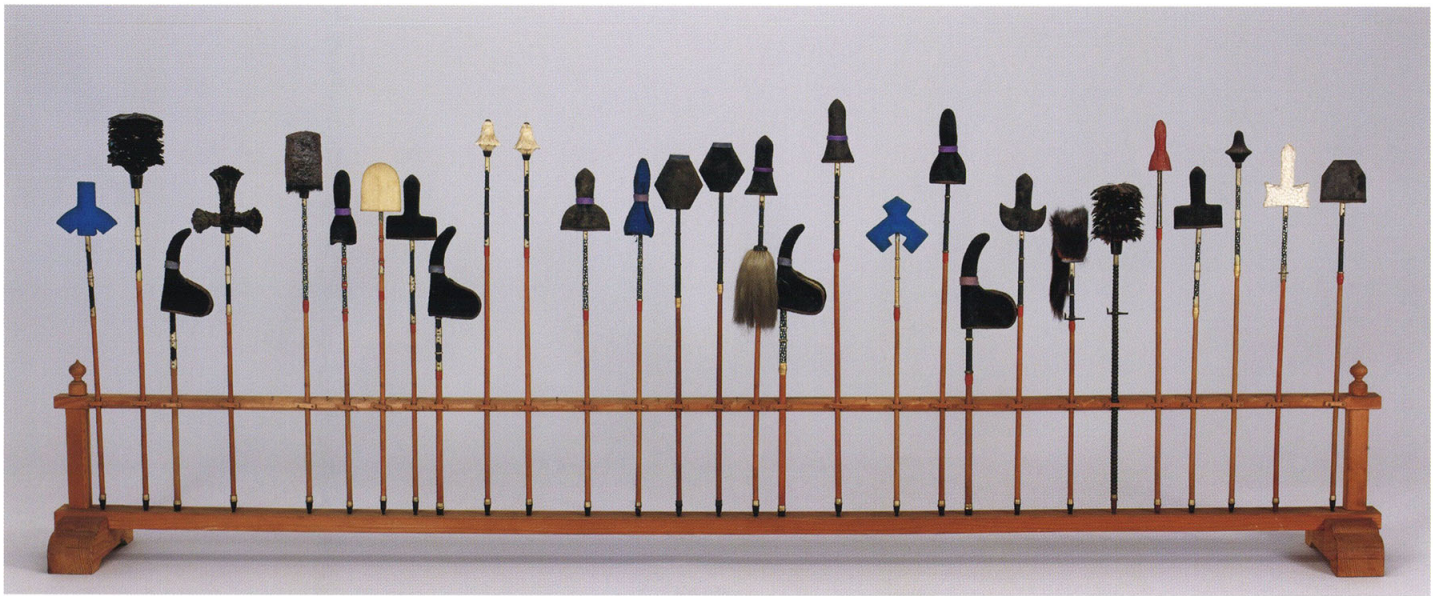
作者の山田幾右衛門は、『東京日日新聞』(「槍襖叢覧」明治十七年十一月四日)、『読売新聞』(「昔大名の行列」明治二十九年十二月七日)の記事によると、明治二十九年当時、六十六歳。京橋区槍屋町で代々幕府の御用槍師を勤めた家に生まれた。幕府の瓦解で家職の衰退に面した幾右衛門は、諸大名家の槍を雛形にして後世に伝えようと思いつき、明治九年より十七年までにわたって、三百諸侯の槍、長刀を造ったという。これが本作に当たると考えられ、実際には二七六家、四七四点が伝えられている。『明治天皇紀』には、明治十七年十月三十一日に明治天皇は親王、大臣、参議等と御陪食を催され、その折に「御次の珈琲の間に槍師某模造の槍襖を陳列せしめ、天覧あらせらる」とある。この御覧の後、間もなくお買い上げとなり、今日まで伝えられてきたものである。本作には槍を立てる台が十六基伴っているが、当初の並べ方が不明であり、各家の内容にも一部に錯簡が認められる。それぞれ、藩名や石高が記された紙札が添えられており、この記述から慶応三年頃の内容が表されているようである。使われている材料は、実際の槍に倣って、柄の螺鈿や金具なども精巧に造られ、鞘の材料もラシャ張り、漆塗りのほか、熊毛や羽根植のもの、貂やウサギの毛皮など様々である。諸大名家の故実を視覚的に伝える大作であり、御用槍師の家に代々伝えられた技が尽くされている。なお、この雛形制作の後、幾右衛門は大名行列を人形で再現しようと試み、小道具や衣裳なども精巧に造った三五〇体あまりの人形を明治二十二年に完成させた。これも宮内省の買い上げとなり、霞ヶ関離宮等で調度として飾られ、現在は東京国立博物館に所蔵されている(参考図版)。この後、さらに六年をかけて毛利、鍋島、戸田松平、秋元、柳生の五諸侯の行列人形五〇〇体余りを制作、明治二十九年十月二十八日より一ヶ月の間、駒込団子坂松葉楼で展覧したという。



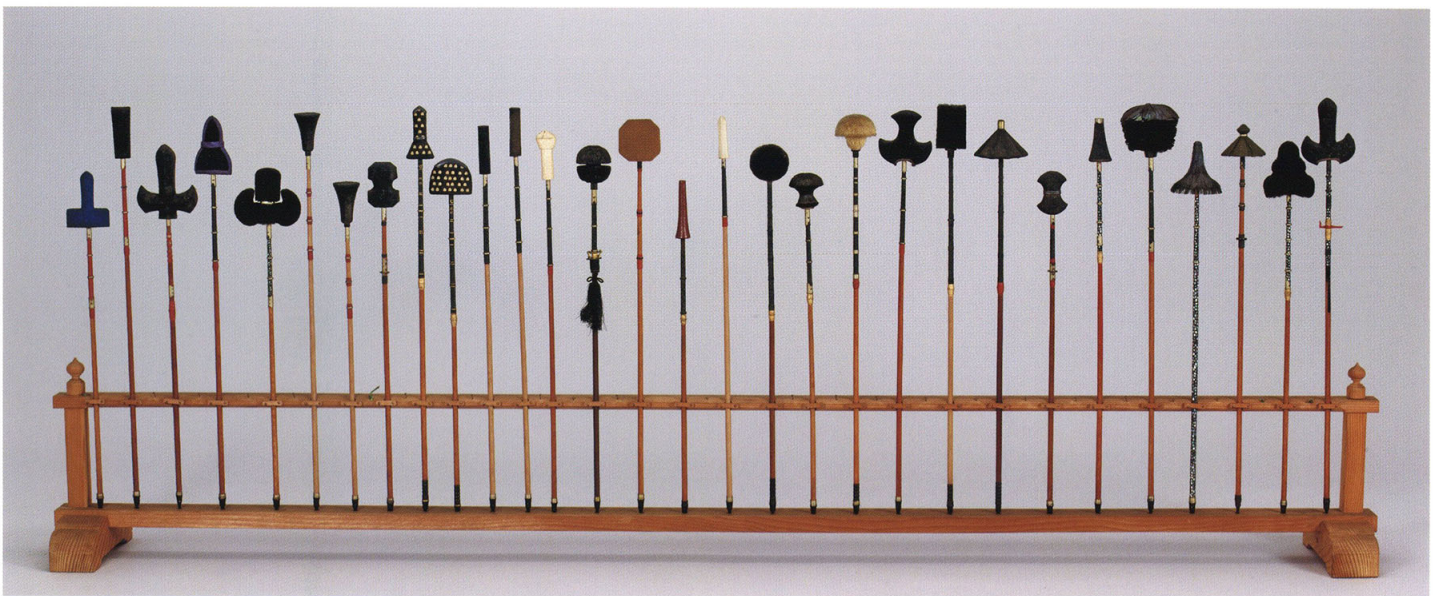
右图部分



右图部分



出羽米沢新田藩 上杉
 出羽米沢藩 上杉
 出羽亀田藩 岩城
 常陸松岡藩 中山
 出羽秋田新田藩 佐竹
 出羽久保田藩 佐竹
 越後清崎藩 松平
 出雲広瀬藩 松平
 陸奥八戸藩 南部
 陸奥盛岡藩 南部
 陸奥七戸藩 南部
 越前福井藩 松平
 伊勢桑名藩 久松松平
 越前丸岡藩 有馬
 下野吹上藩 有馬
 常陸宍戸藩 松平



美濃苗木藩 遠山
 常陸麻生藩 新庄
 備中浅尾藩 蒔田
 常陸牛久藩 山口
 河内狭山藩 北條
 日向高鍋藩 秋月
 播磨林田藩 建部
 伊勢長島藩 增山
 肥前大村藩 大村
 播磨小野藩 一柳
 伊予小松藩 一柳
 越後村松藩 堀
 備中足守藩 木下
 丹波山家藩 谷
 大和柳本藩 織田
 大和芝村藩 織田
 越後椎谷藩 堀
 出羽本庄藩 六郷
 摂津麻田藩 青木
 武蔵岩槻藩 大岡
 三河西大平藩 大岡
 肥前福江藩 五島
 備中新見藩 関
 近江大溝藩 分部
 播磨赤穂藩 森
 播磨三日月藩 森



信濃松代藩 真田



摂津尼崎藩 桜井松平



播磨龍野藩 脇坂

【参考】「大名行列人形」東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

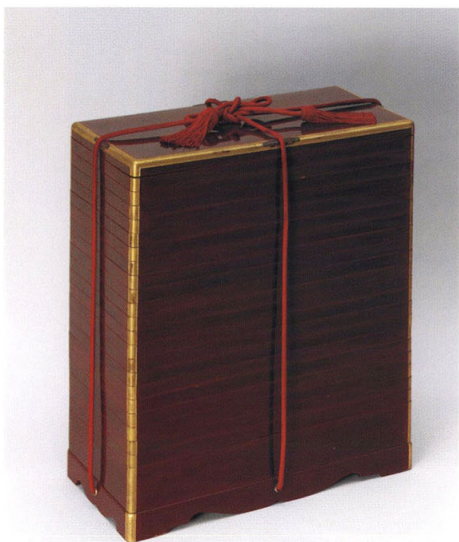
19 日本歴代古金銀貨幣模造鑑 藤島常興 一組

金、銀ほか
 総一八・五×五七・五×六五・五
 明治二十二年（一八八九）



20 日本各邦製古金銀貨幣模造鑑 藤島常興 一組

金、銀ほか
 総二八・五×五七・五×六五・五
 明治二十二年（一八八九）

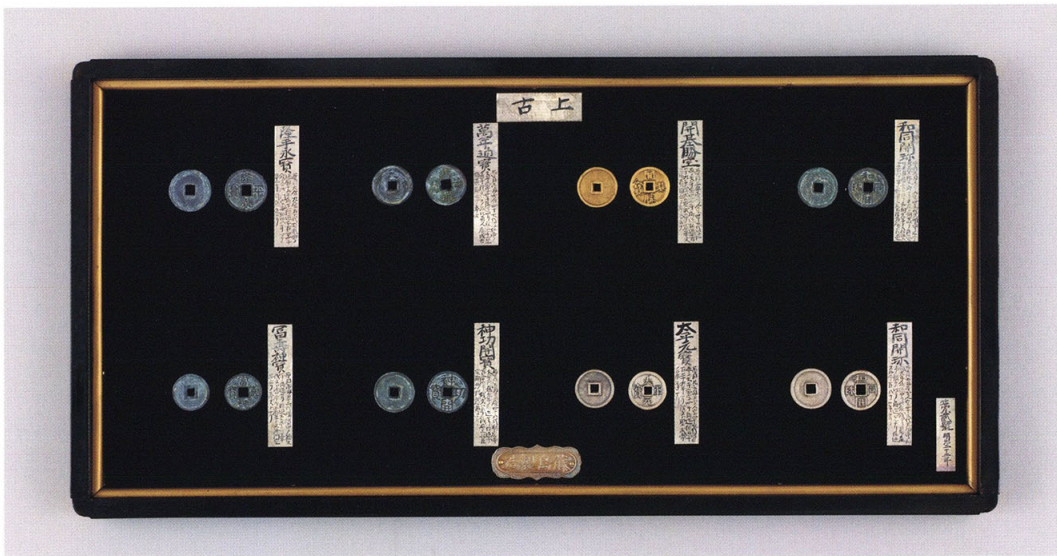


各二十二段の重ね箱にまとめられたこの二組の「古金銀貨幣模造鑑」は、日本の古代から江戸時代末までの貨幣を歴代順に、あるいは地域毎にまとめて総覧できるように、文献や実際に遺されている貨幣を詳細に研究し、金工技術で模造したものである。「日本歴代古金銀貨幣模造鑑」（作品番号19）は箱書きに「日本歴代古金銀貨幣模造鑑 自神功皇后御于至慶応年間」とあり、第十四代仲哀天皇（西暦一〇〇年頃）から幕末の慶応年間までのものが一五〇種、三一九点が収納されている。「日本各邦製古金銀貨幣模造鑑」（作品番号20）は箱書きに「御所女院難判祭祀古金銀判並日本各邦製古金銀貨幣模造鑑 従寿永季間至享保年間」とある。上から二段は、御所女院判あるいは難小判などと呼ばれる、室町時代から桃山時代頃の小判で、禁中に献上、あるいは賜り物や儀式で使用されたものという。三段目以降は各地の貨幣がまとめられ、全部で二九四種、四七八点が納められている。「日本歴代古金銀貨幣模造鑑」は黒漆塗、「日本各邦製古金銀貨幣模造鑑」は潤漆塗の重ね箱で、いずれも中は黒ビロード地を張り、そこに貨幣を貼り付けて、各段をそのまま展示できる体裁となっている。多くが表と裏の二点組で表示されており、各段に「藤島製造」と刻印された銀板が貼られ、銀箔押の題せんに各貨幣の解説が、隅には明治二十二年の年紀と段の番号が貼られている。最上段が「第一号」で、以降、順に番号が付けられる。各種の刻印も緻密に作られており、金属の色味、墨書などもよく模造されている。収納箱の蓋裏に「明治二十二年歲在己丑初冬 生長門国豊浦郡 古光堂 藤島常興作」の墨書がある。

作者の藤島常興（一八二九〜九八）は、銀細工や鋳職を家業とする長府藩のお抱え金工師の家に生まれた。安政三年（一八五六）、常興は江戸へ出て後藤一乗のもとで装剣金工を学び、その一方で時代が求めていた洋式軍事技術に興味を持つようになった。二年後に帰郷、豊浦郡の測量に従事したが、測量器具が粗悪であったため、常興はこの改良に取り組み、以降、測量器具製作に転身することになる。明治五年（一八七二）に工部省に入り、翌年のウィーン万国博覧会に際しては、技術伝習生として渡欧し、測量器具製作を実地で学んだ。この時、常興は四十五才であった。明治十年の第一回内国勸業博覧会では常興の製作した機器が最高賞の龍紋賞を受賞したが、その後は工部省を離れ、独自に測量器械製作所を開設した。この製作所の運営は経済的にかなり厳しく、次第に常興の興味は、貨幣研究へ移り、歴代貨幣の模造と、貨幣史の啓蒙に力を注いだ。本作品の完成と同じ年に常興は模造貨幣を年代にまとめた『日本古金銀貨大全一目表』を出版、この巻頭に模造の目的を「一は以て本邦人の参考に供し、一は以て我邦の淳風を海外に示さんと欲し」と記し、この完成まで六年をかけたという。翌年の第三回内国博覧会にも模造貨幣を出品、求めに応じて同様の模造鑑を作っていたと考えられ、現在東京国立博物館にも常興による模造貨幣が収蔵されている。



第1号



第2号



第7号



第13号



第18号

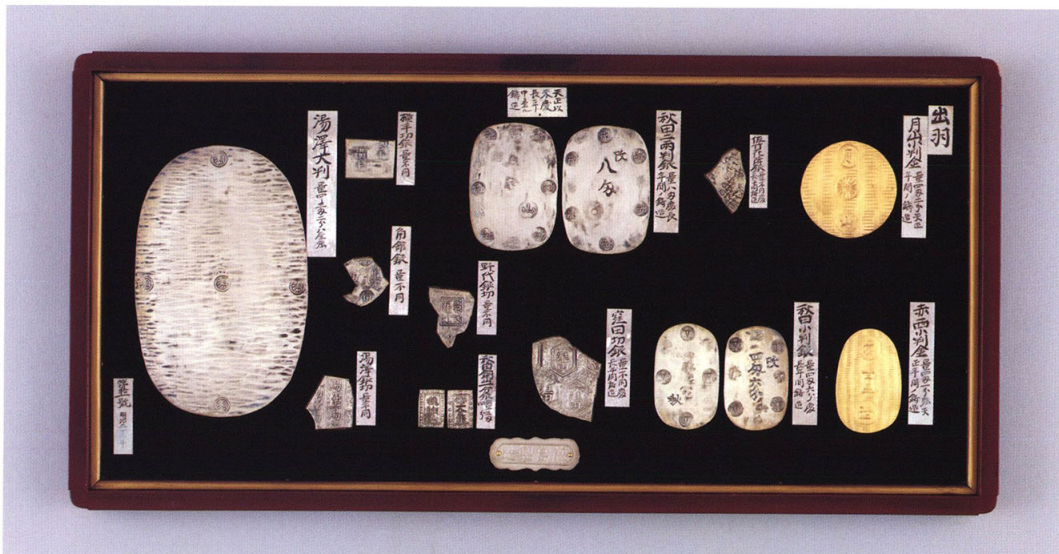


第1号

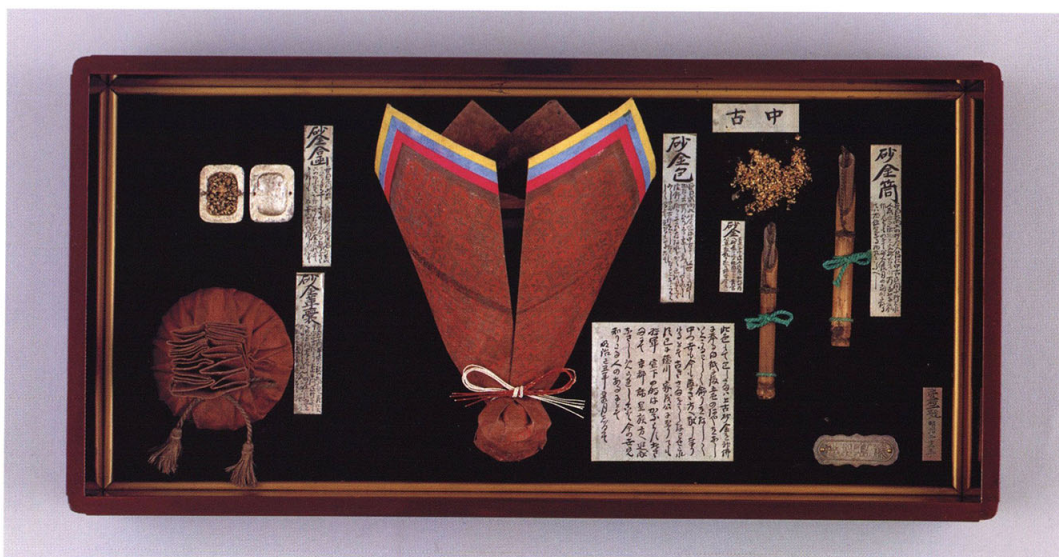
日本各邦製古金銀貨幣模造鑑



第7号



第11号



第22号

21 瑞鳳扇 御木本幸吉 一点

真珠、綴錦、金
総高(台共)六〇・五 巾三〇・七
昭和三年(一九二八)





背面

真珠で飾り立てられたこの長柄の団扇は、昭和三年（一九二八）の大札に際して、三重県より献上されたもので、制作者は同県鳥羽町で真珠の養殖を世界で初めて完成させ、真珠王と呼ばれた御木本幸吉（一八五八～一九五四）である。

金の縁に真珠を連ね、表と裏にそれぞれ瑞雲に鳳凰を表した綴錦を張り、鳳凰の文様の上にも大小の真珠を留め付けており、その総数は一六〇〇以上に及ぶ。金の長柄や上部の桐文に細やかな彫金が施されている。『昭和大札三重県行幸啓記』（三重県、昭和六年）によれば本品の形は法隆寺に伝わる童形の聖徳太子が手に持つ団扇などを参考とし、鳳凰の模様は正倉院宝物七絃琴の金銀平脱の模様に倣ったという。朱塗りの鳥居形の台に立てられているのは、同県が伊勢神宮の御在地にちなんでのことである。

御木本幸吉が半円真珠の養殖に初めて成功したのは明治二十六年（一八九三）のこと。明治三十八年に伊勢神宮へ行幸された明治天皇に拝謁の折り、真円真珠の養殖の完成を確信していた幸吉は「世界中の女性を真珠で飾ってごらんに入れます」と申し上げたという。明治四〇年の東京勸業博覧会には、真珠で飾られた軍配扇を制作して出品、この後、真珠を用いて表した五重塔の置物などを万国博覧会に出品して話題を呼んだ。また、宝飾の細工場を設置してその技術を高めるとともに、デザイン研究を深め、大正期以降、それまでヨーロッパ製の宝飾品を用いていた女性皇族方のティアアラなどの装身具を手がけるようになり、現在のミキモトの礎を築いた。

22 紫雲靈桐鳳凰瑞祥之図 桂田湖城 一幅

絹本金泥

本紙一四二・二×五六・六

昭和三年（一九二八）



昭和の大札を祝って献上された本図は、桐に鳳凰を取り合わせた典型的な吉祥の画題であるが、何よりも驚かされるのが、鳳凰も桐も柵引く雲もすべて細かな文字の集合で表されている点である。文字は「聖壽」「萬歳」の二通りが繰り返し用いられ、一文字の大きさは小さいものはわずか一、二ミリに過ぎない。附属の献上書によれば、桐の部分に二万四千字、鳳凰を描くのに二万四千字、そして瑞雲に四千字を用いたという。

さかのぼれば室町時代にはすでに梵字や経文の漢字を書き連ねて画像を表す仏画の作例があり、江戸時代半ばになると実に十万字を超える経文の文字を微細に重ねて尊像を表す加藤信清（一七三四〜一八一〇）のような画家も登場する。いずれにしてもこうした文字絵による仏画は、仏教に対する信仰心の篤さを表現すべく行き着いた描法と言えよう。また本図も濃紺に染めた

絹地に金泥で描く点は、紺色に染めた料紙に金字あるいは銀字を記した経文を想起させるなど、仏教美術との共通点が多い。若き天皇による昭和という新しい御代を迎える喜びと祝意の気持ち、そしてその尊崇の想いをいかにして表現するか思案した結果、仏画から着想して並々ならぬ時間と労力を要する文字絵の手法がとられたのだろう。

本図はおそらく別紙に筆で同寸の下書きをしたと思われる。桐の幹部分などは肥瘦のある輪郭線を表すべく、文字を柔軟に伸縮させている。鳳凰の尾の流れのような筆線も文字の一画一画の払いを調整することで巧みに表現している。また、金泥の色味や濃淡にも変化をつけ、絵画としての完成度も高く、作者の基本的な技術の高さがうかがえる。作者の桂田湖城（一八六五〜）は、現在の滋賀県に生まれ幼くして京都に出て、十八歳より今尾景年、深田直城に師事した画家である。後に兵庫県西宮市に移って作画活動を行ったことと知られている。なお、本図は尼ヶ崎市在住の木原丑松より献上された。



部分

出品目録

会期 平成二十四年七月二十一日(土)～九月二日(日)

前期…七月二十一日(土)～八月九日(木)
後期…八月十一日(土)～九月二日(日)

出品番号	作品名	作者名	員数	制作年代	技法・材質	サイズ(cm)	展示期間
1	菩薩立像(伝蒙古仏)		一躯	平安時代(十～十一世紀)	木彫、一木造	像高三三・〇	全期
2	蒙古襲来絵詞		二巻	鎌倉時代(十三世紀)	紙本着色	(前巻)総四〇・三×二四五〇・六 (後巻)総四〇・二×二二二・一・八	前期…前巻 後期…後巻
3	黄金分銅		三点	桃山時代～江戸時代初期 (十七世紀)	金	三・五×四・五×一・八 三七・一～三七・三グラム	全期
4	葛細道時絵文台硯箱〔御在来〕		一具	桃山時代～江戸時代初期 (十六～十七世紀)	木製漆塗、蒔絵	文台…三四・九×五九・七×九・五 硯箱…二八・八×二六・七×七・〇	後期
5	葛細道時絵文台硯箱〔旧桂宮家伝来〕		一具	桃山時代～江戸時代初期 (十六～十七世紀)	木製漆塗、蒔絵	文台…三四・八×五九・四×九・三 硯箱…二八・八×二六・七×七・〇	後期
6	葛細道時絵文台硯箱〔上杉家伝来〕		一具	江戸時代(十七世紀)	木製漆塗、蒔絵	文台…三五・〇×五九・五×九・五 硯箱…二八・九×二六・六×六・九	後期
7	蓮華翁茶壺 付書状(伝徳川家康筆)		一口	室町時代後期～桃山時代 (十六世紀)	陶磁	径四二・五 高五四・五	全期
8	南蛮人渡来図屏風		六曲二双	江戸時代(十七世紀)	紙本金地着色	本紙各一五〇・八×三三四・二	前期
9	青海波塗硯箱	伝青海勘七	一合	江戸時代(十七世紀)	木製漆塗、蒔絵	二七・〇×二一・〇×五・七	後期
10	象墜	小島形山	一点	文政六年(一八三三)	牙彫	三・五×五・〇×二・八	全期
11	象墜記 付写本二巻、版本一帖	頼山陽	一巻	文政十年(一八二七)	純本墨書	本紙二〇・二×二五・〇×三	全期
12	プチャーチン長崎上陸図	田川玉巖	一巻	江戸時代(十九世紀)	絹本着色	本紙二八・二×四五・九	全期
13	米国記念牌		二点	一八六〇年	金	プキヤナン大統領肖像…径七・六 三六六グラム ワシントン大統領肖像…径五・三 一五三グラム	全期
14	西南戦争熊本城矢文・征矢		二点	明治十年(一八七七)	紙本墨書、竹、羽	矢文…一三・二×一八・五 矢…長八六・五	全期
15	水晶玉蟠龍置物		一組	明治十二年(一八七九)	水晶、銀・鍍造、 木製漆塗・蒔絵	総高一〇〇・〇 水晶玉 径…一六・四	全期
16	ジャボン製蒔絵菓子器		二点	明治後期(二十世紀)	ジャボン果実皮、 蒔絵	大…一・七×二・三×七・五 小…九・七×一・〇×六・六	後期
17	鶯鳥卯蒔絵盃		一点	明治後期(二十世紀)	卵殻、蒔絵	径六・八 高八・四	後期
18	旧諸大名槍雛形	山田幾右衛門	四七四点のうち	明治十七年(一八八四)	木、漆塗ほか	長三七・七～五七・〇	全期
19	日本歴代古金銀貨幣模造鑑	藤島常興	一組	明治二十二年(一八八九)	金、銀ほか	総二八・五×五七・五×六五・五	全期
20	日本各邦製古金銀貨幣模造鑑	藤島常興	一組	明治二十二年(一八八九)	金、銀ほか	総二八・五×五七・五×六五・五	全期
21	瑞鳳扇	御木本幸吉	一点	昭和三年(一九二八)	真珠、綴錦、金	総高(合巻)六〇・五 巾三〇・七	前期
22	紫雲靈桐鳳凰瑞祥之図	桂田湖城	一幅	昭和三年(一九二八)	絹本金泥	本紙…四二・二×五六・六	全期

謝辞

本展覧会の開催準備にあたり、左記の各氏には調査、資料提供などのご協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。

浅見龍介、小森正明、酒井元樹、杉本まゆ子、原史彦、
四辻秀紀
(順不同、敬称略)

珍品ものがたり

三の丸尚蔵館展覧会図録 No.58

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年七月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

珍品ものがたり

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 58

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成二十四年七月二十一日発行
© 2012, The Museum of the Imperial Collections

List of Exhibits

- 1
Standing Bosatsu (attributed to the Mongol), transmitted in Tsushima Island, an ancient defense location towards the Asian continent
Heian period, 10-11th century
carved wood, *ichiboku-zukuri* (carved from one wood block)
H. 131.0
- 2
Illustrated scrolls of the Mongol Invasion
2 scrolls
Kamakura period, 13th century
color on paper
(first scroll) total size 40.3×2450.6,
(second scroll) total size 40.2×2111.8
- 3
Gold weights transmitted associated with Toyotomi Hideyoshi and Tokugawa Ieyasu
3 pieces
Momoyama to early Edo period, 17th century
gold
3.5×4.5×1.8 372~373g.
- 4
Set of stationery stand and inkstone box with narrow ivy road design in *makie* (transmitted in the Imperial Household)
Momoyama to early Edo period, 16-17th century
lacquer on wood, *makie*
stationery stand : 34.9×59.7×9.5
inkstone box : 28.8×26.7×7.0
- 5
Set of stationery stand and inkstone box with narrow ivy road design in *makie* (transmitted in the former Katsura Family)
Momoyama to early Edo period, 16-17th century
lacquer on wood, *makie*
stationery stand : 34.8×59.4×9.3
inkstone box : 28.8×26.7×7.0
- 6
Set of stationery stand and inkstone box with narrow ivy road design in *makie* (transmitted in the Uesugi Family)
Edo period, 17th century
lacquer on wood, *makie*
stationery stand : 35.0×59.5×9.5
inkstone box : 28.9×26.6×6.9
- 7
Tea jar, “Rengeo”, with a letter attributed to Tokugawa Ieyasu
late Muromachi to Momoyama period, 16th century
ceramic
D. 42.5, H. 54.5
- 8
Folding screen of Arrival of the Nambanjin (western people), from Raigojin Eichoji Temple associated with Tokugawa Ieyasu
pair of six-fold screens
Edo period, 17th century
color on paper with gold foil
each area of painting 150.8×334.2
- 9
Inkstone box with *seigaiha* wave patterns in lacquer, cherished by Tokugawa Mitsukuni of Mito
attributed to Seigai Kanshichi
Edo period, 17th century
lacquer on wood, *makie*
27.0×21.0×5.7
- 10
Netsuke, “Shotsui” depicting the Tang novel Chinchuki (Zhenzhongji)
Kojima Tozan
1823
carved ivory
3.5×5.0×2.8
- 11
Record on details of “Shotsui”, with 2 manuscript copies and 1 printed book version
Rai Sanyo
1827
ink on silk
area of calligraphy 20.1×250.3
- 12
Illustrated Scroll of Russian diplomat Putyatin landing at Nagasaki
Tagawa Gyokugan
Edo period, 19th century
color on silk
area of painting 28.2×451.9
- 13
Medals in commemoration of the first embassy from Japan to the United States of America in 1860
2 medals
1860
gold
Portrait of President Buchanan : D. 7.6 366g.,
Portrait of President Washington: D. 5.3 153g.
- 14
Letter affixed to an arrow, and arrow sent to Kumamoto Castle during the Satsuma Rebellion
2 pieces
1877
ink on paper, bamboo, feathers
letter : 13.2×18.5 arrow : L.86.5
- 15
Crystal ball from the salvaged Neil sunk in the sea of Izu after the Vienna World Exhibition, and dragon made to hold the ball
1879
crystal, cast silver, lacquer on wood, *makie*
total height 100.0 crystal ball diameter 16.4
- 16
Cake bowl made of *makie* on pomelo rind conceived by Emperor Meiji
2 bowls
late Meiji period, 20th century
pomelo rind, *makie*
large bowl : 11.7×12.3×7.5
small bowl : 9.7×10.1×6.6
- 17
Cup made of *makie* on goose egg shell conceived by Emperor Meiji
late Meiji period, 20th century
egg shell, *makie*
D. 6.8, H. 8.4
- 18
Miniatures of spears of the various former *daimyo* families
Yamada Ikuemon
among 474 pieces
1884
lacquer on wood, etc.
L. 37.7~57.0
- 19
Reproductions of successive ancient gold and silver coins made within Japan
Fujishima Tsuneoki
1889
gold, silver, etc.
total size 28.5×57.5×65.5
- 20
Reproductions of ancient gold and silver coins made within Japan
Fujishima Tsuneoki
1889
gold, silver, etc.
total size 28.5×57.5×65.5
- 21
Fan with auspicious clouds and phoenix designs, decorated with pearls
Mikimoto Kokichi
1928
pearls, *tsuzurenishiki* brocade, gold
total height 60.5 W.30.7
- 22
Auspicious motifs such as purple clouds, spiritual paulownias, and phoenixes expressed by lines composed with *kanji* characters
Katsurada Kojo
1928
gold paint on silk
area of painting 142.2×56.6

Rare Pieces with Interesting Histories

July 21 (Sat) — September 2 (Sun), 2012



Foreword

In this exhibition, we will introduce pieces that are not only rare, but those that have a legend behind them in its creation or transmission to the present day.

First, the Mongol Invasion that greatly shook our country in the Kamakura period, was depicted in the scroll painting, *Moko Shurai Ekotoba* (Illustrated scrolls of the Mongol Invasion). This pair of scrolls went through complicated circumstances until it was assembled in to the present state, and is a valuable piece that visually shows this event.

Next, are pieces that historically famous people were involved in their transmission, such as Toyotomi Hideyoshi and Tokugawa Ieyasu. The Set of stationery stand and inkstone box with narrow ivy road design in *makie*, which has a legend that Toyotomi Hideyoshi reproduced it from a piece within the Imperial Court, is magnificent work of gold and silver *makie*, and is well known as a masterpiece of *makie* showing Momoyama characteristics. Our museum collection now has three sets of the same design. Gold weights that were Toyotomi Hideyoshi's stock of money in the Osaka Castle, were passed on to Tokugawa Ieyasu, and offered to the Imperial Household in 1900 by the Owari Tokugawa family.

During the long term of peace during the Edo period, many craft works with intricate craftsmanship were created. Among them, we introduce the *netsuke* called "Shotsui" which is created with superior carving technique. Many towers are carved in the ivory, where 880 people, along with birds and animals are also carved within this small *netsuke*.

Another scroll painting depicting the event in 1853, when the Russian admiral Putyatin arrived at Nagasaki as a diplomat, and also medals presented by President Buchanan to the embassy that visited the United States of America for the first time in 1860, are also exhibited.

We hope it will be an occasion for our visitors to enjoy and direct their attentions to the various stories behind these objects, in their creation and transmission over the years.

July, 2012

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan